

アイヌの^{でんとう}伝統と^{きんだいかいたく}近代開拓による^{さるがわりゆういき}沙流川流域の^{ぶんかてきけいかん}文化的景観（北海道沙流郡平取町）

平成 19 年 7 月 26 日選定，平成 28 年 3 月 1 日，平成 30 年 10 月 15 日追加選定
<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-443>

「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」は，北海道沙流郡平取町に位置し，アイヌ文化の諸要素を現在に至るまでとどめながら，開拓期以降の農林業に伴う土地利用がその上に展開することによって多文化の重層としての様相を示した極めて貴重な文化的景観である。昨今の社会経済的变化による大規模な商業的植林，農地開発，二風谷ダム開発がこの地の環境を大きく変化させ，アイヌ文化の継承や河川生態系の回復などの課題も多く，その脆弱な本質的価値は消滅の危機に瀕していると考えられる。今回の選定対象区域は，文化的景観保存計画を通じて保存管理，整備活用，運営体制に関する基本方針が定められた「ピラトウルナイ区域」「二風谷区域」「芽生区域」「宿主別区域」「額平川区域」「沙流川（シシリムカ）区域」「沙流山林南区域」及び河川区域，町有林・国有林と，復元されたチセを含む「平取町立アイヌ文化博物館」「北海道大学文学部二風谷研究室（旧マンロー邸）」の約 7500ha であり，適宜追加選定申請を行う予定である。



芽生地区（近代開拓）



林業施業の様子



博物館のチセ（アイヌの伝統）



いちのせきほんでら のうそんけいかん
一関本寺の農村景観（岩手県一関市）

平成 18 年 7 月 28 日選定，平成 27 年 1 月 26 日追加選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-199>

岩手県南部の栗駒山（標高 1,627m）東麓に水源を発する磐井川の流域には，河岸段丘から成るいくつかの小盆地が連続し，豊かな農村地帯が展開している。そのうちのひとつが一関市の本寺地区で，特に中世平泉の中尊寺経蔵別当領に関係する骨寺村荘園遺跡の諸要素が良好に遺存するとともに，近世・近代を通じて継続的に営まれてきた稲作，近代に始まった炭焼きなどの農林業を通じて，緩やかに発展を遂げた岩手県南地方の優秀な農村の文化的景観を示す区域である。居住地とその周辺の農耕地及び里山は豊かな生態系を維持し，丘陵裾部の居住地に近接する区域には，比較的小規模で不整形な区画から成る水田が残されているほか，微地形に沿って巡らされた用水系統にも緩やかに変転を遂げた農耕地の姿が窺える。また，水田地帯の微高地に散村の形式で展開する各農家は，北西より吹き付ける強い季節風から家屋を護るために，イグネと呼ぶ屋敷林が巡らされている。このように，本寺地区の農村景観は，特有の歴史的起源に基づきつつ，この地に独特の気候・風土を踏まえた農耕と居住の在り方を示す貴重な文化的景観である。



一関本寺の農村景観（全景）



自然地形に沿って湾曲した水路



各構成要素が一体となって景観を形成する



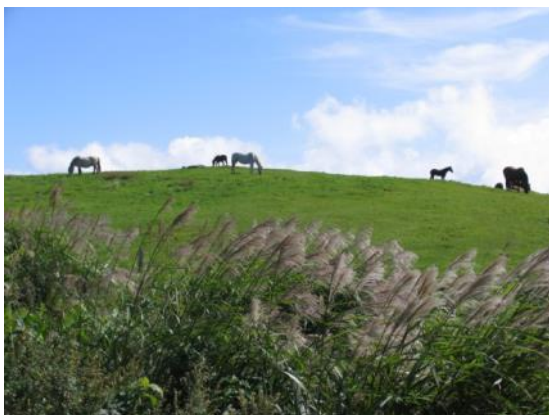
イグネ（屋敷林）に囲まれた農家

とのおの あらかわこうげんぼくじょう つちぶちやまぐちしゅうらく
遠野 荒川高原牧場 土淵山口集落（岩手県遠野市）

平成 20 年 3 月 28 日選定，平成 21 年 2 月 12 日追加選定，
 平成 25 年 3 月 27 日追加選定・名称変更

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-206>

柳田國男(1875-1962)の『遠野物語』には，遠野に生きる人々の生活・生業の実態を示し，特に自然・信仰・風習に関連する独特の文化的景観が描かれている。遠野市の北東部に位置する荒川高原牧場は，『遠野物語』の原点を成す「馬」・「馬産」に関する代表的な景観地で，早池峰山周辺の準平原に広がる牧草地を利用しつつ，地域の基幹産業として継続的に営まれてきた独特の放牧に関する土地利用の在り方を示している。また，荒川高原の麓に位置する荒川駒形神社は，「馬」・「馬産」への信仰を表すものとして，牧場と密接に関係しつつ発展した。遠野市東部に位置する土淵山口集落は，三陸沿岸部に通ずる街道沿いに発達した居住地で，物語の題材となる説話を柳田國男に語り伝えた佐々木喜善の生家や，かつて老人が共同で余生を送ったと伝わる「デンデラ野」及び囚人の処刑地伝説が伝わる「ダンノハナ」といった居住地周辺の霊地など，説話の舞台となった場所が良好な環境のもとに継承されている。



荒川高原牧場における馬の放牧



駒形神社の鳥居・拝殿・手水舎



土淵山口集落全景



ダンノハナにおける百万遍の数珠回し

もがみがわ りゅうつう おうらい あてらざわまち ば けいかん
最上川の流通・往来及び左沢町場の景観（山形県西村山郡大江町）

平成 25 年 3 月 27 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-269>

左沢は、米沢・長井盆地と山形盆地とをつなぐ最上川の峡谷部に位置する。左沢の町場景観のうち、楯山を中心とする山稜区域には中世に大規模な山城が築かれ、左沢は政治・行政上の拠点として機能した。市街地北部に当たる楯山では近年まで薪炭材等を供給する里山として機能し、現在もコナラ・クヌギ等の二次林が卓越する。また、最上川を中心とする河川区域では、歴史的に河川舟運及び漁業などの生活・生業が営まれた。幕末に大規模な築が設置された記録が残るほか、近代には茶屋が置かれ船頭衆で賑わった。さらに、町場が展開する市街地区域は、17 世紀前半に左沢藩主となった酒井直次により小漆川城の設置及び城下町の造営が行われ政治都市として機能した。他方で、近世に米沢藩の蔵屋敷が設置されるなど河岸が発達したことにより、山間部で産出された青苧などの取引を中心とする最上川舟運によって町場が展開した。近代には鉄道敷設に伴い駅前に新たな市街地が発達したほか、昭和 11 年の大火を受けて、近世以来の地割りを継承しつつ道路拡張が行われるなど、時代に応じて展開した町場の計画的な街区構造が重層的に表れている。このように、最上川の流通・往来及び左沢町場の景観は、最上川河畔における政治都市と河岸集落という複合的な都市機能を示しつつ、中世から現代にかけての各時代の都市構造が重層した文化的景観である。



楯山城から望む左沢の町場



最上橋と最上川船着場の近傍



初市をむかえた中央通り商店街



近世にさかのぼる原町通

もがみがわじょうりゅういき ながい まちばけいかん
最上川上流域における長井の町場景観（山形県長井市）

平成 30 年 2 月 13 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-277>

山形県南西部の最上川上流左岸の朝日連峰支脈である西山と最上川上流右岸の東山に囲まれた長井盆地の中心に位置する長井の町場は、中世以前からの門前町及び宿場町等の性格が複合した 2 つの在郷町である宮村と小出村を起源とする。新潟へ向かう越後街道、庄内・出羽三山方面へ向かう道智道等が交差する交通の要衝であり、それぞれの村では宮村館や白山館が政治的拠点となり、商いの中心となる宮の十日町、小出のあら町が米沢藩の物資の集散地として長井の町場の発展を牽引した。特に、最上川舟運期には、宮村に米沢藩の陣屋と船着場、小出村には商人衆による船着場が設置され、公的な青芋蔵や上米蔵が置かれて、置賜地方西部の物資の集散地・商業地として流通・往来の中心となった。江戸時代後期に描かれた『小出村絵図』には、館の周辺に役人が居住し、町人が現在のあら町や本町などの通り沿いに居住する様子が描かれており、在郷町としての役割を果たしつつ商人の町としても発展したことが伺える。現在も本町、大町、高野町、十日町、あら町等では、商人が居住した通り沿いに間口が狭く奥行きが深い短冊状の地割りが並び、店・住宅・蔵と続く土地利用を確認することができる。現在も最上川西岸の街道に沿って商家群等が点在する町場景観は、江戸時代の最上川舟運に由来する町場景観として重要である。



長井橋上空から町場を望む



十日町のまちなみ



平野川



あら町の町並み

とねがわ わたら せがわごうりゅういき みずばけいかん
利根川・渡良瀬川合流域の水場景観（群馬県邑楽郡板倉町）

平成 23 年 9 月 21 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-269>

群馬県の最東端に位置する板倉町では、利根川と渡良瀬川との合流点に形成された低湿地（水場）が展開している。当地は古くから洪水多発地帯であり、豊かな土壌・生態系が育まれる一方、生活を営むために様々な工夫が行われてきた。当地における人々の居住は縄文時代から確認されるが、広大に展開する沖積低地における集落形成や開墾は、中世末期から近世にかけて実施された築堤や河川の瀬替えによって実現した。近代には大規模な治水事業が行われ、現在に通じる水利システムが完成された。こうした治水事業によって開墾された低地では、主に水田耕作が行われている。水田の中には、河川や沼に面した湿地に溝状の堀を掘り、その掘削土を客土（揚げ土）し掘り上げ田を造成した、川田と呼ばれる農地も営まれている。また、自然堤防上を中心に形成されている居住地では、屋敷地の一画に土盛りをし、その上に水塚と呼ばれる避難用建物が築造されている。屋敷地の北西にはエノキ・ムクノキなど自然堤防の環境に適応した郷土種や、水防にも有効なタケ類が植栽されており、防風屋敷林として機能している。このように、利根川・渡良瀬川合流域の水場景観は、大河川の合流域に形成された低地で営まれてきた水と共生する生活・生業上の様々な工夫によって育まれた価値の高い文化的景観である。



全景（南から）



川田での耕作



屋敷林に囲まれた居住地



高台に築かれた水塚

かつしかしばた ぶんかてきけいかん
葛飾柴又の文化的景観（東京都葛飾区）

平成 30 年 2 月 13 日選定

<http://www.museum.city.katsushika.lg.jp/shibamata/>

柴又地域は東京都葛飾区の東端，江戸川右岸に位置する。柴又地域には古代から人々が生活し，水陸交通の結節点・中継地点であった。江戸初期に現在の地に開かれた帝釈天題経寺は，18世紀後半の板本尊の発見を機に江戸からの参拝客が急増した。近代以降も，鉄道網の整備により門前はますます多くの人々でにぎわい，昭和の初期には参道沿いにまとまりのある景観が形成された。また，19世紀には柴又用水が開削され，20世紀前半には金町浄水場が開設された。

葛飾柴又の文化的景観は，古代から続く人々の生活や往来を全体の基底としながら，近世初期に開基された帝釈天題経寺と近代以降に発展したその門前の景観を中心に，それらの基盤となった，農村の様子を伝える旧家や寺社等の景観がその周囲を包み，さらにその外側に，19世紀以降の都市近郊の産業基盤や社会基盤の整備の歴史を伝える景観が広がっている。また，水路の痕跡や道等もよく残っている。以上のように，葛飾柴又は，地域の人々の生活，歴史，風土等によって形成され，それらを現在に伝える重要な景観地である。



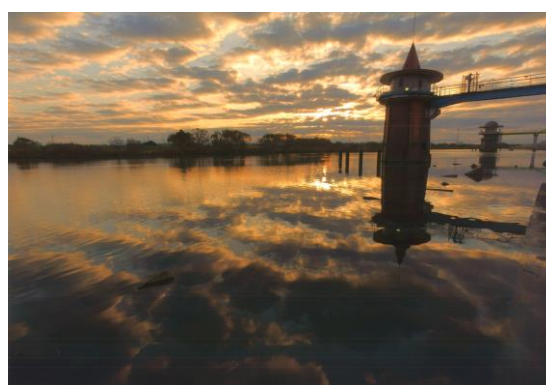
帝釈天参道



矢切の渡し



帝釈天



江戸川と取水塔

さどにしみかわ さきんざんゆらい のうさんそんけいかん
佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観（新潟県佐渡市）

平成 23 年 9 月 21 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-326>

佐渡島の南西部，真野湾に注ぐ西三川川流域一帯には金銀鉱床が展開しており，古くから砂金採掘が行われた。その結果，現在は斜面の掘削による平坦面・被植に乏しい裸地や地崩れ地形・独立丘陵など特異な地形が形成されている。砂金採掘の記録は平安時代に遡るが，産金量が増大した中世末期には砂金採掘の中心地であった西三川川中流域の山間地に集落が形成され，近世も徳川幕府の財政を支えた佐渡金銀山の一つとして西三川砂金山は栄えた。江戸時代中期以降は次第に産金量が減少し，明治 5 年（1872）に西三川砂金山は閉山となった。閉山後は砂金採掘跡や堤跡の田畑への転換，砂金流し用水路の農業用水路への転用といった農地開発が行われ，明治末期には現在の農村へと産業構造の転換がほぼ完成するに至った。こうした田畑や水路は現在も機能しており，近世の鉱山跡地や鉱山技術を応用した農地開発にかかる土地利用の変遷を確認することができる。集落内では長年の砂金採掘によって生じたガラ石を用いて，家屋の敷地境界線や道路法面に石垣が築かれており，屋敷の配置構成も近世の砂金採掘時代の形態を継承していることが絵図によって示されている。このように，佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観は，古代から近代まで行われた砂金採掘によって形成された独特の地形・技術を，閉山後も巧みに土地利用に活かし農山村へと産業構造の転換を成功させた地域の歴史的変遷を示す価値の高い文化的景観である。



笹川集落全景



砂金採掘が行われた虎丸山



山中に点在する水路跡・ガラ石



ガラ石積みの基礎を有した居住地

さ ど あいかわ こうざんおよ こうざんまち ぶんかてきけいかん
佐渡相川の鉱山及び鉱山町の文化的景観（新潟県佐渡市）

平成 27 年 10 月 7 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-334>

相川は、標高約 300 m の山地から海成段丘を経て狭い海岸低地が続く地形上に位置する。17 世紀初頭、相川で鉱脈が発見されると急速に鉱山開発が進んだ。慶長 8 年（1603）、佐渡代官に任じられた大久保長安（おおくぼながやす）は上町（かみまち）台地の尾根線上に幹線道路を敷き、沿道に大工町など職業別の町立てを行った。17 世紀前半には海岸沿いの下町（したまち）で埋め立てを伴う町立てが行われ、上町と下町とをつなぐ段丘崖に石段等が発達した。18 世紀に金銀の産出量が激減すると、上町等に散在していた鉱業関係施設が佐渡奉行所内に集約された。他方で商人の中には廻船業等で財を成す者も現れ、下町には蔵を伴う大規模な地割りの廻船問屋等が並んだ。近代には鉱山が三菱へ払い下げられ、上町には間口が広く通りに面して庭を有する社宅も立地した。下町には相川町役場等の公的機関が立地し、行政機能を持つようになった。現在も上町は各町家が短冊状の地割りを継承しつつ、通りに面して平屋構造を持ち背後に段々と降りる吉野造りを成している。下町は旧街道沿いに展開する近世以来の地割りを継承しつつ、海岸部を埋め立て佐渡市役所支所等が配置され、行政の中心地機能を強化している。当該文化的景観は、鉱山地区の生産機能、上町地区の居住・行政機能、下町地区の流通・行政機能が、金銀採掘の盛衰に伴い動的な関係を構築しつつ展開してきた相川の歴史の変遷を示す景観地である。



春日崎から望む相川の上町・下町



鉱石を運搬するための鉱車の軌道跡



テラス状の敷地に建てられた鉱山住宅（上町）



善知鳥神社例祭の神輿や高張提灯の行列

かなざわ ぶんかてきけい かん しろしたちょう でんとう ぶんか
金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化（石川県金沢市）

平成 22 年 2 月 22 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-343>

現在の金沢市街地は「金沢御堂」の門前に形成された寺内町を始まりとし、その後に形成された近世城下町を基盤とする。城下町は、寛文・延宝期（1661～80）にほぼ完成し、その形態は「寛文7年金沢図」、「延宝金沢図」において確認することができる。絵図が示す街路網は細街路に至るまで現状にほぼ一致し、城下町の町割や用水は現在の金沢市街地の街路及び街区の構造を決定している。また、藩政期の金沢においては、三代利常、五代綱紀によって漆工、金工、陶芸などの制作が奨励され、御細工所を設けて生産品の芸術的な技術水準が高められたが、これらの多くは維新後に旧武家層によって商業化され、現在も金沢の主要な生業となっている。以上のように、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」は、わが国における城下町発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承し、街路網や用水路等の諸要素が現在の都市景観に反映されるとともに、城下町が醸成した伝統と文化に基づく伝統工芸等の店舗が独特の界隈を生み出す貴重な文化的景観である。



金沢市街地（西から）



近江町市場の賑わい



浅野川河畔



長町を流れる大野庄用水



おおざわ かみおおざわ まがきしゅうらくけいかん

大沢・上大沢の間垣集落景観（石川県輪島市）

平成 27 年 10 月 7 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-352>

急峻な山が日本海に直接迫る能登半島北側は、海から強い季節風を受ける地域であり、多くの集落が内陸部に立地している。その中で、大沢・上大沢の集落は湾を成す低地に位置し、後背の狭い谷地の限られた傾斜面に耕作地を有する。集落は平安時代以降は志津良荘（しつらのしょう）に属していたと考えられる。

集落から離れた棚田では重労働を軽減するためにイナハザで稲を乾燥させてから運搬しているほか、海に面する集落の外周部には高さ 4～5 m の細いニガタケを垂直に立てて作った「間垣」と呼ばれる垣根を設置し季節風から家屋を守っている。現在でも稲作と並行して海藻採取等が続けられている。日本海に面した地域の半農半漁の生活様式の中で、里山の資源を耕作及び独特な形式の垣根として最大限に利用してきたことを示す大沢・上大沢の文化的景観は我が国の生活生業を知る上で欠くことのできないものである。



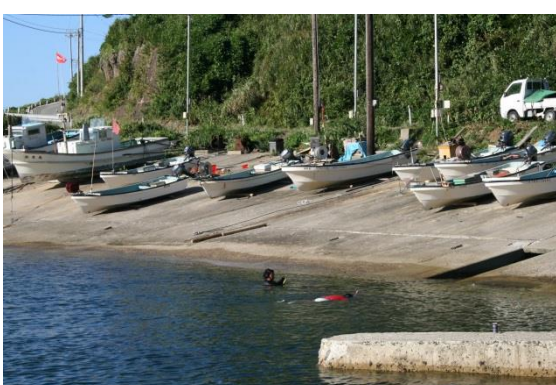
冬の大沢集落



間垣と防風林



上大沢集落



テンマ船が並ぶ船揚げ場

おぼすて たなだ
姨捨の棚田（長野県千曲市）

平成 22 年 2 月 22 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-420>

古くから月見の名所や棄老伝説で著名な姨捨山北麓の標高 460～550m の傾斜地には、千曲川から善光寺平に至る広大な盆地に臨んで約 1500 枚の水田から成る棚田が展開している。近世初頭に畑作と稲作が混在する農耕が定着し始め、利水が進展することにより稲作が主体となり、近世末～近代に日本を代表する棚田の文化的景観を形成した。

姨捨の棚田の基本構造は、土石流が形成した斜面上に展開する棚田を中心として、水源である更級川上流の大池と斜面下方の集落とが有機的に結びついている点にある。近世初頭における営農は斜面上の小湧水群を利用して出発したが、大池から更級川を経て各用水へと給水する灌漑手法が導入され、土坡の畦畔を超えて導水する「田越」と呼ぶ灌水方法や、水田の下層に敷設された「ガニセ」と呼ぶ暗渠による排水方法が採用されることにより、棚田は斜面全体へと広がっていった。

姨捨の棚田は、水源となる大池から更級川へと繋がる水系を軸として、用水や田越の給水手法が網の目のように張り巡らされ、近世から近現代に至るまで継続的に営まれてきた農業の土地利用の在り方を示す独特の文化的景観であり、我が国民の生活又は生業を理解する上で欠くことのできないものである。



尾根筋に展開する棚田



四十八枚田と田毎観音



水源地の一つ、大池



収穫期の棚田

こすげ さと こすげさん ぶんかてきけいかん
小菅の里及び小菅山の文化的景観（長野県飯山市）

平成 27 年 1 月 26 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-430>

小菅は、長野県北部の飯山盆地東縁に営まれる集落で、小菅山山麓の緩斜面上に広がる。集落を囲む山々ではブナ群落・ナラ群落等が卓越しており、それらはかつて薪炭材等に利用されたほか、集落内でもカツラ・ケヤキなどの樹木が植えられており、小菅神社の例大祭である「小菅の柱松行事」に用いられている。

小菅山は 7 世紀前半に遡る修験の山であり、戦国時代には北信から上越に及ぶ信仰圏を誇ったとされる。小菅神社の直線的な参道の両側に方形の区画を持つ坊院群が密集する古絵図が伝わっており、現在も、当地で産出する安山岩を用いた石積み等で区画された地割が、居住地及び耕作地として継承されている。

小菅では、山体崩壊により生じた湧水等を居住地に引き込み、カワ又はタネと称する池で受け、洗いのもの・消雪等に利用している。また、集落北方の北竜湖から用水を引き、居住地背後の水田・畑地の灌漑に利用している。水路の維持・管理など集落の共同作業はオテンマと称し、地域共同体の紐帯として機能している。

小菅の里及び小菅山の文化的景観は、小菅山及びその参道沿いに展開した計画的な地割を持つ集落景観で、カワ又はタネと称する水利が特徴的な文化的景観である。



小菅の里 遠景



集落内の参道（カイド）から妙高を望む



小菅の柱松行事



オテンマ

ながらがわちゅうりゅういき ぎふ ぶんかてきけいかん
長良川中流域における岐阜の文化的景観（岐阜県岐阜市）

平成 26 年 3 月 18 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-531>

美濃山地の南端，濃尾平野の北端の長良川中流域では古くから鵜飼が行われ，長良川堤外地には鵜飼屋地区の鵜匠宅を含む集落及び水運によって発展した問屋業による川原町地区の伝統的町並みが文化的景観を形成している。

また，長良川と金華山に挟まれた扇状地では，中世末から近世に織田信長等によって総構を持つ岐阜城及び城下町が形成され，武家地・寺社地・町人地が形成された。落城後も長良川を介した物資集散地としての地の利を生かし，材木・和紙・糸等を扱う問屋業，提灯・団扇・傘等の手工業を中心とする商業に依拠した岐阜町が発展した。城下町に由来する総構の土塁，水路，街路，町割り等の基本的な構造は現在の土地利用にも踏襲されており，城下町由来の構造の中に残る町家等とともに文化的景観を呈している。

このように，長良川中流域における岐阜の文化的景観は，長良川を中心とした鵜飼漁や問屋業等によって形成された文化的景観及び岐阜城下町の構造を基盤に発展形成された岐阜町の文化的景観が重層したものであり，我が国における生活又は生業の理解のため，欠くことのできないものである。



長良川及び金華山麓に展開する町場



鵜飼が実施される長良川



鵜匠宅の構え



丁寧に手入れされる伝統的な町家

おうみはちまん すいごう
近江八幡の水郷（滋賀県近江八幡市）

平成 18 年 1 月 26 日選定，同年 7 月 28 日追加選定，平成 19 年 7 月 26 日追加選定
<http://www.city.omihachiman.shiga.jp/kyouikubunka/bunsin/25.html>

近江八幡の水郷は，西の湖及びその周辺に展開するヨシ原などの自然環境が，ヨシ産業などの生業や内湖と共生する地域住民の生活と深く結びついて形成された文化的景観である。その中に位置する円山及び白王の集落は，西の湖の北端に位置する里山（円山・白王山）の南面にあり，北からの風を避けるように山裾に列状に展開している。かつて主たる交通手段を舟運に頼っており，各家が内湖に接する必要があったことから，里山の等高線と内湖に沿った連続的な居住形態を示している。

円山の集落では，現在もヨシ管理とその加工業が主な生業である一方で，白王の集落では，大中の湖を干拓によって失ったことにより，内水面漁業との関係が希薄となった。しかし，湿地に点在する水田での農業活動やヨシ管理を通じ，現在も内湖との関係を維持している。ヨシ産業と内水面漁業という，生活基盤としての生業に相違があったため，それぞれの集落は，石積水路や石垣等の構成，主屋・蔵と作業小屋・屋外作業空間・水際空間の配置に異なる特徴を示している。



西の湖上空より円山・白王の集落を望む



水路を利用した和船での水郷めぐり



山裾に沿って立地する円山の集落



伝統的な生業の手法を継続する（ヨシ刈り）

たかしましはいづ にしはま ちない みずべけいかん
高島市海津・西浜・知内の水辺景観（滋賀県高島市）

平成 20 年 3 月 28 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-302>

「高島市の海津・西浜・知内の水辺景観」の最大の特徴は、琵琶湖をはじめとする河川・内湖、扇端部の湧水を水源とする小河川、さらに増水時に冠水する水田等によって形成される多様な水界である。これらはそれぞれ、地域固有の豊かな生態系を示し、特に魚類の種類は多様である。琵琶湖の魚類に併せて発達した伝統漁法に、河川を簀で遮断し、遡上する魚を漁獲部分に誘導するヤナ漁や、カラスの羽を着けたサオで湖岸に寄るアユを驚かせながら網に追い込むオイサデ漁等がある。漁法以外にも、洗濯のための「橋板」や「イケ」と呼ばれる水場や共同井戸など、多様な水文化が残る。本地区が歴史的に本格的な発展を遂げるのは、日本海から琵琶湖を経て京都に向かう湖上交通網が整備された 15 世紀以降のことである。特に江戸時代においては、宿場・港町として多くの人や荷物が行き交い、内湖を活用した荷物の積み出しや受け取りが行われ、旅人を相手とする商売が栄えるなど、港湾都市としての様相を呈していたと考えられる。特に海津は、陸路と航路の結節点に当たり、地域の生産品である淡水魚や石灰を含む多くの物資を、京都・大阪に運んだ。以上から「高島市の海津・西浜・知内の水辺景観」は、古来より北陸道や琵琶湖の湖上交通を背景として、輸送や商業活動それに携わる人々の流通・往来が生み出した極めて重要な文化的景観である。



海津の街並み



奥田沼



湖上から海津の集落を望む



知内川のヤナ

たかしもしはり え しもふり みず べけいかん
高島市針江・霜降の水辺景観（滋賀県高島市）

平成 22 年 8 月 5 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-310>

高島市新旭町針江・霜降は、安曇川下流域に広がる扇状地の扇央部に位置する集落で、周囲には豊富な湧水を活用した水田が展開している。集落内では湧水に端を発する大小の水路が縦横に流れ、針江大川を経て琵琶湖に注ぐ。針江大川流域・水路・水田及び湿地・河口域の内湖及びヨシ帯・琵琶湖が一つの水系として連続しており、豊かな生態系が育まれている。集落の起源は少なくとも中世に遡る。当時、比叡山延暦寺の荘園として既に広大な田地が開かれており、近世期には湿地を埋めて耕地化したことが記録されている。集落では湧水を活用したカバタと呼ばれる独特の洗い場を多くの家庭が有しており、その水は集落内の水路を経て水田・河川・琵琶湖岸へと繋がることから、水の使用については住民間で暗黙の規則が共有されてきた。また、湧水は重要な生活上の資源として神聖視されており、湧水点では石造物等が祀られ地域住民によって維持・管理されている。近年はこうした水環境を「生水」と称し、地域の水環境を保全する取組が進められている。このように、安曇川の湧水を利用した独特の生活が営まれると同時に、集落・河川・水田・ヨシ帯等が一体的な水環境を形成する貴重な文化的景観である。



安曇川扇状地に展開する針江・霜降の集落



針江大川河口付近



カバタと集落内の水路



日常の用に供するカバタ

ひがしくさの さんそんけいかん
東草野の山村景観（滋賀県米原市）

平成 26 年 3 月 18 日選定

<http://www.city.maibara.lg.jp/kanko/rekishi/shitei/4594.html>

東草野は、滋賀県の北東部に位置する伊吹山地の西麓に所在し、姉川上流の谷部に形成された山村である。峠を介し、隣接する岐阜県旧坂内村や滋賀県旧浅井町等との流通・往来が古くから盛んであったことは、例えば県境を越えて行われる「廻り仏」など習俗に表れている。当地は西日本屈指の豪雪地であり、冬季には集落内でも約 3m に及ぶ積雪となる。そのため、民家はカイダレと呼ばれる長い庇を備えており、軒下に積雪時も使用可能な作業場を確保するほか、敷地内の設えられたイケ・カワト等は消雪に用いられるなど、豪雪に対応した生活の在り方が認められる。当地の基本的な生業は農業であるが、甲津原の麻織、曲谷の石臼、甲賀の竹刀など、冬季を中心とした特徴的な副業が集落ごとに発達した。また、東草野の最南部に位置する吉槻は南北及び東西の交通路の結節点であり、行政施設・商店等が集積する中心地として機能してきた。このように、東草野の山村景観は、滋賀県北東部の姉川上流において、峠を介した流通・往来によって発達した景観地で、カイダレなど独特の設備を備えた民家形態や、集落ごとに発達した副業など、豪雪に対応した生活・生業によって形成された文化的景観である。



姉川最上流部に位置する甲津原集落



「雪掘り野菜」の収穫イベント



カイダレでできた広い軒下空間



石臼の非製品を用いた階段

すがうら こがんしゅうらくけいかん
菅浦の湖岸集落景観（滋賀県長浜市）

平成 26 年 10 月 6 日選定

<https://www.city.nagahama.lg.jp/0000000278.html>

菅浦は、琵琶湖最北部の急峻な沈降地形に営まれた集落である。鎌倉時代から江戸時代にかけての集落の動向を記した『菅浦文書』によると、永仁 3 年（1295）、菅浦は集落北西に所在する日指・諸河の棚田を、隣接する集落である大浦と争い、以降 150 年余りにわたって係争が続いたことが知られる。また、14 世紀半ばには住民の自治的・地縁的結合に基づく共同組織である「惣」が、菅浦において既に作り上げられていたことが分かる。中世以来の自治意識及び自治組織は、時代に応じて緩やかに変化しながら、現在まで継承されている。菅浦の居住地は、西村及び東村に大きく二分され、それぞれ西の四足門及び東の四足門で集落の境界を表している。また、湖から集落背後の山林にかけて連続する地形の中で明確な集落構造が認められる。特にハマと呼ぶ湖岸の空間は、平地が狭小な菅浦において極めて有用であり、生産の場・作業場・湖上と陸上との結節点といった多様な用途が重層している。このように、菅浦の湖岸集落景観は、奥琵琶湖の急峻な地形における生活・生業によって形成された独特の集落構造を示す景観地である。中世の「惣」に遡る強固な共同体によって維持されてきた文化的景観で、『菅浦文書』等により集落構造及び共同体の在り方を歴史的に示すことができる希有な事例である。



菅浦全景



日指・諸河の棚田



西の四足門



ハマミチの石積み前を通る御輿（春祭り）



おおみぞ みず べけい かん
大溝の水辺景観（滋賀県高島市）

平成 27 年 1 月 26 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-318>

大溝は琵琶湖北西岸で営まれる集落で、集落南部には湖岸砂州により琵琶湖と隔てられた内湖の乙女ヶ池が広がる。大溝は、古代北陸道の三尾駅及び湖上交通の主要湊である勝野津が比定される交通の要衝として機能してきた。戦国時代から江戸時代にかけて大溝城及び城下町が整えられ、乙女ヶ池と琵琶湖との間の砂州上に打下集落が置かれた。明治初期の蒸気船就航、昭和初期の鉄道敷設など大溝を取り巻く交通事情は変化してきたが、旧街道沿いに列村形態を成す集落構造は現在も継承されている。

大溝の旧城下町区域では、近世に遡る古式上水道が現在も利用されている。水源地と高低差がない勝野井戸組合では埋設した水道管で各戸に配水し、大溝西側の山麓に水源を持つ日吉山水道組合では、分水のためにタチアガリと呼ばれる施設を設けている。他方で、打下集落では琵琶湖側に高波・浸水防止のための石垣を築いた。水草が繁茂する乙女ヶ池には水田地先の個人所有地と水草の刈取りを入札で決めた共有地があり、琵琶湖内湖の共同利用の在り方がわかる。

このように、大溝の水辺景観は、中・近世に遡る大溝城及びその城下町の空間構造を現在も継承する景観地で、琵琶湖及び内湖の水又は山麓の湧水を巧みに用いて生活・生業を営むことによって形成された文化的景観である。



大溝遠景（右が琵琶湖，中央が乙女ヶ池）



タチアガリ



打下集落の水田



大溝祭（中町通り）

いばないこ のうそんけいかん
伊庭内湖の農村景観（滋賀県近江八幡市）

平成 30 年 10 月 15 日選定

<https://www.city.higashiomi.shiga.jp/0000008894.html>

湖東平野中央部に位置する伊庭内湖，水路が発達した集落と周辺の水田，繖山の一峰である伊庭山からなる。伊庭集落は，琵琶湖最大の内湖であった大中の湖に流入する伊庭川の三角州上の微高地に形成された集落であるが，内湖の干拓を経て，現在は伊庭内湖と呼ばれる大中の湖西端部，須田川となった小中の湖北端部に接する。集落東の繖山の豊かな湧水を源流とする伊庭川が集落中央を西へ流れ，縦横に発達した水路を介して水田に分水し伊庭内湖に注ぐ。近世，集落は現在の小字に継承される独立性の高い七つの町で構成されており，町の境界の多くは主要な水路と重複することが確認できる。水路の水は農業のみならず，各敷地から水路に延びる階段状のカウトを介し，魚の畜養など生活の中で利用されている。自動車の普及以前は舟運が中心で，水路を日常生活の主要経路とする屋敷構えが行われた。土地を最大限に利用するため，水路の石積み直上に建てられた「岸建ち」と呼ばれる建造物も特徴である。伊庭山から神輿を引きずり下ろし，集落を経由し伊庭内湖まで巡行する伊庭祭では，かつては水路を経路としていた。伊庭内湖の農村景観は，琵琶湖岸における水の利用及び居住の在り方を知る上で欠くことのできないものとして重要な景観地である。



伊庭川と水路



伊庭内湖から集落を望む



伊庭川と岸建ち



カウトで野菜を洗う

う じ ぶんかてきけいかん
宇治の文化的景観（京都府宇治市）

平成 21 年 2 月 12 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-222>

宇治は、京都市の南に接し、古くから渡河点としてまた奈良街道の通過点として、流通・往来における結節の機能を果たした。宇治川に最初の本格的な架橋が行われたのは大化2年（646）であり、これに伴って橋の両側に集落が形成されたと考えられる。宇治川左岸に発達した市街地は、格子状を基本とする構成と平等院の旧園路（現在の路地）に沿って展開する密集した居住地を特徴としている。宇治市街地遺跡の発掘調査を通じ、この構造は、藤原氏が別業を計画的に配置するために行った古代末の都市計画に基づくことが明らかとなっている。当時の計画によって構成された地割は、現在の街路・街区にその痕跡を留めている。中世には碾茶の生産が展開し、安土・桃山時代から近世を通じ、宇治は碾茶における中心的な役割を果たすようになった。明治以降は生産品を玉露へ転換するとともに、海外向け輸出品として煎茶の高級茶を生産し続けた。宇治は、茶文化に関連する有形・無形の要素を留めている。「宇治の文化的景観」は、重層的に発展した計画的な街区と茶文化によって形成される文化的景観である。



宇治川と宇治市街地



平等院表参道の茶店舗街



白川地区の茶畑



本簀の下における茶の収穫

みやづあまのはしだて ぶんかてきけいかん

宮津天橋立の文化的景観（京都府宮津市）

平成 26 年 3 月 18 日選定，

平成 27 年 1 月 26 日追加選定及び市境変更に伴う一部解除

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-104>

宮津天橋立の文化的景観は、宮津湾と阿蘇海とを隔てる天橋立及びその南北に展開する文化的景観である。

このうち、宮津湾西岸から阿蘇海北岸に位置する府中地区には、丹後国分寺跡や条里制に遡る農地などが所在しており、古代丹後国府の所在地に比定される。中世から近世にかけて、当地が成相寺・籠神社等による信仰の中心として機能したことは、16 世紀初頭に雪舟が描いた『天橋立図』等によって示される。さらに、近代になるとケーブルカー等が整備され、土産物・旅館街等の町並みが形成されるなど、観光拠点として発達した。他方で、国分・小松・中野等の農業集落は旧道沿いに単列の街村形態を成しており、集落内の石積み水路には洗い物をするためのアライバが設えられている。また、阿蘇海ではかつてキンタルイワシと呼ばれたマイワシ漁が盛んであり、溝尻の漁村には海に面して舟屋が連続するなど、特徴的な文化的景観が展開している。

また、文珠地区は智恩寺を核とした天橋立信仰の中心地で、近世の四軒茶屋に遡る観光の中心地として機能してきた。智恩寺参詣の中心地及び天橋立参詣の拠点として展開してきた地域であり、信仰及び観光によって発展を遂げてきた土地利用の歴史的重層性を示す地区として、独特の文化的景観が展開している。



宮津天橋立の文化的景観 遠景



国分集落のアライバ



智恩寺門前のにぎわい



溝尻集落の舟屋群

きょうとおかざき ぶんかてきけいかん
京都岡崎の文化的景観（京都府京都市）

平成 27 年 10 月 7 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-230>

京都東山の麓，白川の扇状地に位置する岡崎は，平安時代には院政が執り行われた白河殿のほか，六勝寺の大伽藍及び園池が造営された地域である。応仁の乱の後農業を主体とする地域となり，岡崎村，聖護院村として都市近郊農業が成立した。近世には白川の支流が灌漑用水として流れていたことが分かる。近代には，殖産興業策の一つとして琵琶湖疏水が建設され，水運，水力発電等によって京都の近代化の礎を築くとともに，平安遷都 1100 年記念祭及び第 4 回内国勸業博覧会が開催された。また，南禅寺界隈では別荘の開発が進み，疏水の水を活用した庭園群が形成された。博覧会跡地には岡崎公園，京都市美術館等の文化施設が建設され，京都を代表する文教地区として現在に至る。

京都岡崎の文化的景観は，白川の扇状地の利点を最大限に活用し，古代から中世には寺院群，中世から近世には都市近郊農業，近代には琵琶湖疏水の開削に伴い文教施設や園池等が展開するなど，大規模土地利用を経た京都市街地周縁部における重層的な土地利用変遷を現在に伝えるものである。



岡崎公園界隈



琵琶湖疏水



別邸群のアカマツ



祝祭空間としての神宮道と平安神宮大鳥居

ひねのしょうおおぎ のうそんけいかん
日根 荘 大木の農村景観（大阪府泉佐野市）

平成 25 年 10 月 17 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-864>

大阪南部の泉州地方の平野部から、和泉山脈の燈明ヶ岳（標高 558m）を中心とする犬鳴山麓にかけての地域には、中世の五摂家のひとつである九条家の荘園に起源を持つ日根荘の農村地帯が広がる。その中でも、大木は犬鳴山に水源を持つ檜井川沿いの小さな盆地に位置し、紀州の粉河へと通ずる街道沿いに拓かれた水田及び村落が、荘園の名残を示す用水・地名などとともに、泉州地方の山間地における農耕・居住の良好な文化的景観を形成している。日根荘は、天福 2 年（1234）に立券され、天文年間（1532～1555）まで維持された荘園である。16 世紀初頭に日根荘へと下向した九条政基の『政基公旅引付』により、当時の荘園内における農産物の品目が知られる。また、19 世紀後半の『大木村絵図』等によると、現在の土地利用形態は近世期からほとんど変化していないことがうかがえる。日根荘大木の農村景観は、中世における摂関家の荘園に起源を持ち、和泉山脈における盆地の地形とも調和し、当時の土地利用の在り方を継承しつつ、近世から現代にかけて緩やかに進化を遂げた農村の文化的景観であり、我が国民の基盤的な生活又は生業を理解する上で欠くことのできないものである。



大木地区全景



小学校の農作業体験



旧道沿いの石積み



火走神社秋祭り（担いだんじり）

いくのこうざん こうざんまち ぶんかてきけいかん
生野鉱山及び鉱山町の文化的景観（兵庫県朝来市）

平成 26 年 3 月 18 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-110>

但馬と播磨との境に位置する生野では、古くから鉱山開発が進められた。開坑は大同 2 年（807）と伝わるが、史料での初見は『銀山旧記』であり、天文 11 年（1542）に但馬守護職の山名祐豊が石見銀山から採掘・製錬技法を導入したとされている。江戸時代には口銀谷・奥銀谷等に灰吹小屋が立ち並び、生野の町は隆盛した。明治になると近代技術が導入され、昭和 48 年（1973）の閉山まで、我が国有数の鉱山として機能した。閉山後もスズの精錬及びレアメタルの回収が現在まで行われており、特にスズの精錬量は我が国有数の規模を誇る。生野市街地には、鉱業都市を示す要素が数多く分布している。かつて物資の輸送路として活躍したトロッコ道は、現在も市道として交通の軸線を形成している。また、製錬滓をブロック状に固めたカラミ石は、民家の土台や塀、水路など至る所で用いられている。かつて鉱山に関わる信仰として行われた山神祭は、現在はへいくろう祭等にその精神が引き継がれており、鉱山町における生活と密接に関わる習俗・伝統が、現在も継承されている。このように、生野鉱山及び鉱山町の文化的景観は、鉱山開発及びそれに伴う都市発展によって形成された文化的景観であり、現役の鉱業都市として生産活動及び祭等の習俗を継続しつつ、トロッコ道跡やカラミ石の石積みなど鉱業都市に独特の土地利用の在り方を示している。



口銀谷全景



地区を貫く市川及び右岸のトロッコ軌道跡



カラミ石の石積み



口銀谷の町並みと銀谷まつり

おくあすか ぶんかてきけいかん
奥飛鳥の文化的景観（奈良県高市郡明日香村）

平成 23 年 9 月 21 日選定

<http://www.asukamura.jp/bunkatekikeikan/index.html>

明日香村の中央部を貫流し大和川へ注ぐ飛鳥川の源流域では、スギ・ヒノキが卓越する深い植林地の中に集落・農地が営まれている。奥飛鳥地域の記録は皇極天皇元年（642）に遡ることができ、中世末期には入谷・栢森・稲渚・畑の四大字が飛鳥川上流域のムラとして成立したとされる。地域ではハギやヤマブキなどいわゆる万葉植物の植生も卓越しており、豊かな生態系が育まれている。飛鳥川沿いに展開する河岸段丘面上や山裾、山の緩斜面上には、小規模な集落が展開する。いずれも斜面地に平場を造成するために、飛鳥川の川石や山を切り開いた際に出土した石材を用いた石積みを伴う。集落の中には、急傾斜の茅葺き屋根と緩傾斜の瓦葺き屋根を有した落棟とを組み合わせた大和棟の民家が点在しており、石積みと併せて独特の集落景観を形成している。地域では主に農業が営まれており、特に稲渚では地域でも有数の広さを誇る棚田が形成されている。棚田には 15 世紀に遡るとされる井手によって水が供給されており、最長 3.8km を誇る大井手をはじめ数 10 本の井手が耕作者によって管理されている。地域では集落から飛鳥川に降りる階段を設えたアライバが現在も機能しており、また盆迎え・盆送りが飛鳥川を通じて行われるなど、飛鳥川と強く結びついた生活が営まれている。このように、奥飛鳥の文化的景観は、飛鳥川上流域において展開される、地形に即して営まれてきた居住の在り方と、農業を中心とした生業の在り方とを示す価値の高い文化的景観である。



稲渚の棚田



河岸段丘上に立地する稲渚集落



石積みが顕著な栢森集落



大和棟の家屋が卓越する入谷集落

あらぎじま み た し み ず の う さん そん けい かん
蘭島及び三田・清水の農山村景観（和歌山県有田郡有田川町）

平成 25 年 10 月 17 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-452>

有田川の上流域では、穿入蛇行により形成された河岸段丘が形成されており、広く水田耕作が行われている。その中でも、河川蛇行部へ弧状に張り出した段丘地形において棚田が展開する蘭島は、審美的な観点からも価値が高い。中世の阿豆河荘に遡る当地において、現在に繋がる土地利用の基礎が築かれたのは、大庄屋笠松左太夫が集落・農地開発を行った近世である。明暦元年（1655）には、有田川支流の湯川川に井関を設け、湯と称する灌漑水路網を整備することにより、水田化が進展した。それぞれの湯では田人と呼ばれる水利組合が組織されており、現在も部頭（水利組合長）の下に水守が定められ、水路の補修・清掃・管理等が共同で行われている。また、耕地に限られる当地では、畦畔や集落の後背斜面等も山畑に利用された。かつて和傘に用いられた保田紙の原料であるヒメコウゾのほか、シュロ・チャノキ・サンショウなど、特徴的な植生を確認することができる。このように、蘭島及び三田・清水の農山村景観は、有田川上流域に形成された独特の河岸段丘地形において営まれてきた農業及び山の利用による文化的景観である。



蘭島全景



山端を流れる上湯



小学校の農作業体験

ち ず りんぎょうけい かん
智頭の林業景観（鳥取県八頭郡智頭町）

平成 30 年 2 月 18 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-727>

智頭における植林は、江戸時代に入り鳥取藩によって多くの山は管理され、山林の減少が原因とされる大洪水や飢饉などの被害が相次ぎ、災害対策と産業振興としてスギの植林を盛んに進められた。智頭の林業にとって最も重要であったのが、積雪地帯であるこの地に生息していた天然スギを利用して明治期において育苗技術が確立されたことであった。この技術確立により、明治期に植林された 100 年生を超えるスギ人口林が豊富に残っており、その後の大正時代から戦後の造林期に植えられた植林も多く、高齢、若齢人工林と高い山々には天然スギと広葉樹林が混じりあった森林景観を形成している。また、林業を生業として暮らしてきた芦津集落は茅葺民家や土蔵などが多く現存しており、集落を取り囲む森林は、林業集落ならではの景観や森林資源で財を得た石谷家住宅を中心とした宿場町も当時から現在に至る往来の面影を残す歴史的景観を形成している。さらに木材の運搬手段とした千代川、森林鉄道、旧街道も往時の生業の姿を垣間見れる景観である。このように林業という中心的産業を通じて、森林・山村集落・宿場町・流通往来景観など多様性に富んだ景観が形成され、中山間地における造林の典型的な林業景観である。



智頭宿とその周辺



慶長杉周辺の山並み



石谷家住宅



慶長杉



おくいずも せいてつ たただ けいかん
奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観（島根県仁多郡奥出雲町）

平成 26 年 3 月 18 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-118>

斐伊川の源流部に位置する奥出雲地域は、起伏の緩やかな山地と広い盆地が発達しており、「真砂鉄」と称される良質な磁鉄鉱を多く含有する地帯であることから、近世・近代にかけて我が国の鉄生産の中心地として隆盛を極め、「たたら製鉄」が栄えた。丘陵を切り崩し水流によって比重選鉱するという「鉄穴流し」が広範囲に行われ、この鉱山跡地（鉄穴流し跡）では、後にその地形を活かして豊かな棚田が拓かれた。

江戸時代、松江藩は、有力鉄師（たたら経営者）のみに鉦株（鉦経営権）を与え、安定経営を図ったため、国内の一大鉄生産地域となった。明治に入り、安価な洋鉄が大量に輸入されるようになったことなどから、たたら製鉄は次第に衰退し、大正末年には一斉廃業となった。その後、日本刀の材料となる「玉鋼」が枯渇したことから、昭和 52 年にたたら製鉄が選定保存技術として復活している。

このように、奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観は、たたら製鉄・鉄穴流し及びその跡地を利用した棚田によって形成されたものである。鉄穴横手（水路）及び鉄穴残丘が点在する棚田が広がりを見せる農山村集落を、かつて鉄山（たたら製鉄用の木炭山林）であった山々が取り囲み、その一部で今なお、たたら製鉄が行われている景観地は、我が国における生活又は生業の理解のため欠くことのできないものである。



鉄穴流し跡に拓かれた棚田と追谷集落



鉄師であった櫻井家の住宅



鉄穴残丘が点在する棚田



鳥上木炭銑工場と日刀保たたら

かしはら たなだ のうそんけいかん
檜原の棚田及び農村景観（徳島県勝浦郡上勝町）

平成 22 年 2 月 22 日選定,

平成 25 年 10 月 17 日追加選定・名称変更（旧名称：檜原の棚田）

四国の勝浦川上流部は急峻な地形の合間に棚田と農家が散在する地域で、その中の檜原地区には、深い山林に覆われた里山を背景として、檜原谷川へと連続する標高 500～700m の急傾斜面上に 3 つの棚田と居住地が展開する。閉じられた山間の地すべり地形を示す窪地状の地形に、一群の棚田と農家がまとまって展開する農耕と居住の在り方は、この地域の典型的・代表的な土地利用形態を示し、良好な文化的景観を形成している。檜原の棚田を中心とする土地利用形態の最大の特質は、文化 10 年（1813）11 月の紀年銘のある『勝浦郡檜原村分間絵図』に描かれた水田の位置・形態、家屋・道・堂宇・小祠の位置などとの詳細な照合が可能なことである。精度高く描かれた詳細な内容と現況との比較により、200 年以上もの間、土地利用形態がほとんど変化していないことがわかる。棚田への水利系統は、檜原谷川から等高線に沿って引かれた 14 本の用水により精巧に張り巡らされている。檜原の棚田は、全体の面積が大きいのに対し、水田 1 枚当たりの平均面積が 180 m²と小さく、平均勾配は約 4 分の 1 と急勾配であり、立地する標高も町内の他事例に比較して最も高いなど、この地域における棚田の中でも特質が見られる。



田植えを間近に控えた棚田



田植えの様子



曲線で形成される耕地



棚田オーナー制が採用される

ゆ す み ず が う ら だ ん ば た
遊子水荷浦の段畑（愛媛県宇和島市）

平成 19 年 7 月 26 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-168>

四国島の西端に当たる宇和島市遊子の水荷浦は、豊後水道に向かって延びる三浦半島の北岸から、さらに宇和海及び宇和島湾に向かって分岐する今一つの小さな岬の小集落である。岬の東南側の急傾斜面には、等高線に沿って小さな石を積み上げて形成された壮大な雛段状の畑地が展開し、特に水荷浦では「段畑」と呼ばれている。近世・近代を通じてサツマイモの栽培により形成された「段畑」は、宇和海沿岸の風土とも調和して、沿岸におけるイワシ漁や湾内のハマチ養殖業とも深く関連しつつ、農耕を継続的に営むことにより緩やかな発展を遂げた特色のある文化的景観である。「段畑を守ろう会」や地域の自治会などが中心となって、ジャガイモ栽培を中心に都市農村交流事業が積極的に実施されており、今後の文化的景観の維持・活用についても期待される。



収穫期を迎えた段畑のジャガイモと海面に浮かぶ養殖筏（撮影：石崎幸治氏）



全景



段畑の石積み

おくうち たなだ のうさんそんけいかん
奥内の棚田及び農山村景観（愛媛県北宇和郡松野町）

平成 29 年 2 月 9 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-184>

四国南西部では、四国山地と多くの支脈が東西方向に走るため、西側沿岸部はリアス式海岸である一方、内陸部は無数の山地が広がり平坦地がほとんど無い。他方、四万十川はこの地域の中心を源流部として蛇行しながら土佐湾へ向けて東流する。奥内の棚田及び農山村景観は、四万十川の支流広見川上流部の奥内川沿いの山間部に位置する江戸時代中期以降に形成された 4 つの棚田群からなる農山村景観である。古文書等の調査からは、地形条件に沿って、谷部を水田、尾根部を屋敷地、屋敷地周辺を畑として継続して利用されてきたことが確認され、その結果、ヒメアカネ及びアキアカネ等の赤トンボ類を含む貴重な生態系が現在も維持されている。また、山間部ではアラカシ、コジイ、コナラ等の天然生林が広範囲で形成されており、地域本来の希少な山林景観を望むことができる。平成 11 年に農林水産省の「日本の棚田百選」に認定されてからは全戸加入の保存会が結成され、体験学習会等の棚田保全活動が積極的に進められている。

奥内の棚田及び農山村景観は、四国南西部の四万十川源流域の山間部を開墾した小規模な棚田群からなる文化的景観であり、四国山間部の厳しい地形条件の中で江戸時代以来現在まで継続されてきた生活又は生業を知る上でも重要である。



稲刈り体験



棚田と井上家住宅の主屋及び土蔵



棚田での生業（榎谷）



棚田の石垣

う わ かいかりはま だんばた のうぎょそんけいかん
宇和海狩浜の段畑と農漁村景観（愛媛県西予市）

平成 31 年 2 月 26 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-176>

愛媛県南西部に位置する狩浜は、宇和海に面するリアス海岸の入江の集落で、近世の狩浜浦を引き継ぐ。元は鰯漁を営む漁村であったが、その浮き沈みを農業で補う中、甘藷や麦から榎、養蚕へと作物を転換してきた。現在はみかん栽培を主要な産業とし、漁業も入江の利点を生かした真珠養殖等が行われている。

当地では、近世の鰯漁と、近代の養蚕業の隆盛を通じて人口が増え、山腹に畑地を広げ、入江、居住地、段畑、山林が連なる壮大な景観が形成されてきた。急斜面に広がる段畑は、所々に露頭する石灰岩を用いて農民が築いてきたものであり、幾段にも重なる灰白色の石垣がみかんの緑や橙に彩られて際立つ眺めを成す。

このような景観は、春日神社の秋祭りが地域の結びつきを保ち、また、昭和 50 年頃から進められている有機農業がまちづくりへと繋がる中で維持されてきた。

宇和海狩浜の段畑と農漁村景観は、黒潮の影響を受ける愛媛県南西部のリアス海岸における土地利用を示し、また風土に根ざした斜面地農業の展開を伝え、我が国における生活や生業の理解に欠くことのできないものとして重要である。



上空から見た狩浜地区



入江，居住地，段畑，山林が連なる景観



石垣とみかん



春日神社の秋祭り

しまんとがわりゅういき ぶんかてきけいかん げんりゅういき さんそん
四万十川流域の文化的景観 源流域の山村（高知県高岡郡津野町）

平成 21 年 2 月 12 日選定，平成 24 年 1 月 24 日追加選定

<http://www.shimanto.or.jp/keikan/tsuno.html>

津野町は四万十川の源流域にあり，不入山を含む地域である。源流には豊かな自然が残り，「四万十源流の森」として保全されている。津野町には，平野部が少なく，河岸から上部の山林まで続く傾斜地に張り付くように居住地や耕作地が展開している。一部の農地で圃場整備が実施された今も，700m 級の山々を背景として，小さい石垣に支えられた小規模な畑や棚田を数多く認めることができる。かつてこうした畑では，イモ，麦，粟，豆などが作られていたが，現在は，茶畑が中心である。また，比較的広い平地には水の確保を目的として，サイフォン式水路を伴う用水の整備が行われ，その痕跡を認めることができる。「四万十川源流域における農山村集落景観」は，四万十川の自然的条件に適応しつつ，川に面し，家屋や畑地，里山等が一体となって発展した，四万十川流域における居住の在り方を示す文化的景観である。



北川（四万十川の第 2 支流）



四万十川の源流点（不入山）



船戸集落



茶畑が展開する桂地区

しまんとがわりゅういき ぶんかてきけいかん じょうりゅういき さんそん たなだ
 四万十川流域の文化的景観 上流域の山村と棚田（高知県高岡郡檮原町）

平成 21 年 2 月 12 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-261>

檮原町は、四万十川上流域にあり、四万十川最大の支流である五段域（標高 1456m）に源を発する檮原川の源流に当たる。檮原町は極めて平地が少なく、町内における小規模な棚田の総面積は 236ha に及ぶ。中でも神在居の棚田（2.3ha）は檮原町内に点在する棚田の中でも特に勾配が厳しく、源流域の乏しい水を合理的に利用しつつ耕作を続けてきた。また、豊かな森林は藩政時代から檮原町の財産であり、人々は集落の共有地として常に共同で管理し、火入れをして採草するとともに樹木を伐採して薪の採取や製炭を行ってきた。特に昭和 30 年代に高まった国内の木材需要に答えるために行われた拡大造林により、檮原町は大林業地帯となった。昭和 50 年代には、多くの山村が構造不況に基づき林業活動を手控え始める中で、檮原町は、町単独事業を通じて林業に常に積極的な姿勢を示し、1990 年代以降においても地域内連携の組織化や国際的な森林認証制度による高付加価値化を積極的に図ることにより、一貫して林業による地域づくりを進めている。このように、「四万十川流域の文化的景観 上流域の山村と棚田」は、四万十川上流域の厳しい自然条件の下で営まれた林業と小規模な棚田の耕作によって形成された文化的景観である。



檮原川に架かる初瀬橋



河岸に咲く岸つつじ



神在居の棚田



棚田の石積み

しまんとがわりゅういき ぶんかてきけいかん じょうりゅういき のうさんそん りゅうつう おうらい
四万十川流域の文化的景観 上流域の農山村と流通・往来（高知県高岡郡中土佐町）

平成 21 年 2 月 12 日選定，平成 23 年 2 月 7 日追加選定

http://www.mantentosa.com/culture/keikan/keikan_oonomi.html

中土佐町は四万十川上流域に位置し，中でも標高 300m の高原台地に広がる大野見地区においては，地区を二分して貫く四万十川本流に数々の支流が流れ込んで美しい渓谷を形成し，川の流れに沿って水田が発展するとともに，農林業の複合経営に活路を求めてきた場所である。大野見地区の 97% に広がる森林は，杣や木挽きによって切り開かれ，川を利用して「管流し」で下流へと流された。これらは中土佐でいったん陸揚げされた後，陸路を久礼まで運ばれ，久礼の港から下田を経由して近畿圏などに輸送された。また，大野見地区の最も大きな特徴は，四万十川本流に 12 ヶ所見られる堰のうち，6 ヶ所が集中しているという点である。藩政期から努力して繰り返された小規模ではあるがきめの細かい開墾と新田開発は，度重なる灌漑工事の結果であり，これにともなって構築された堰が地区内に遺存する。「四万十川流域の文化的景観 上流域の農山村と流通・往来」は，四万十川上流域の狭い土地に農地を開墾し，新田開発を行うとともに，木材の輸送を通じて形成された文化的景観である。



榎野の集落と長野沈下橋



四万十川本流最上流の高樋沈下橋



長野堰



炭焼き

しまんとがわりゅういき ぶんかてきけいかん ちゅうりゅういき のうさんそん りゅうつう おうらい
四万十川流域の文化的景観 中流域の農山村と流通・往来（高知県高岡郡四万十町）

平成 21 年 2 月 12 日選定，平成 23 年 9 月 21 日追加選定

<http://www.town.shimanto.lg.jp/outer/bunka/>

四万十町は四万十川中流域に位置し，特に檮原川下流区域では人々は主に林業に従事するとともに，山地を切り開いて棚田や段々畑を営んできた。また，舟運に対する安全祈願の信仰を集めた三島地区や，筏師が集積した小野地区は，独特の場所として重要な構成要素となっている。特に小野には四万十川流域の林産物を一手に扱う商人達が生活しており，彼らが扱った商品の中には三桠やワラビ粉とともに，楮を原料とした仙花紙と呼ばれる和紙が含まれていた。また，四万十町内には大規模な田園地帯が広がり，仁井田米に代表される県内有数の穀倉地帯でもある。開拓により開かれた広大な農地は富の集積を生み出し，四国霊場第 37 番札所の門前町として発展した窪川の発展を促すことによって，四万十川中流域に商業を基盤とする都市的な営みを作り出した。このように，「四万十川流域の文化的景観 中流域の農山村と流通・往来」は，四万十川中流域が示す豊かな自然環境と，農林業によって形成される多様な土地利用，流通・往来の営みによって形成される独特の文化的景観である。



壱斗俵の水田地帯



壱斗俵の沈下橋



三島の集落



小野の集落

しまんとがわりゅういき ぶんかてきけいかん かりゅういき なりわい りゅうつう おうらい
四万十川流域の文化的景観 下流域の生業と流通・往来（高知県四万十市）

平成 21 年 2 月 12 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-656>

四万十市は四万十川下流域に位置し、黒尊川流域、四万十川下流域、四万十川河口域からなる。黒尊川流域は広大な森林資源を有し、一部の原生林が保護されるとともに、体験型学習の場として活用されている。また、四万十川下流区域は、豊富な水量と広い川幅や河原を持ち、火振漁などの淡水漁業が行われている。中でも口屋内地区は、物資輸送において上流域と河口域を結ぶ中継地として栄え、現在もその痕跡を留めている。四万十川河口区域は、四万十川本流のうち、四万十市入田から河口までの約 13.5km の区域とその河畔林及び下田を含む区域である。このうち、河口から約 9km 上流までが汽水域で、この水域の広さが豊かな生物相を育むとともに、川魚や藻類の生産を含む生業の場としての価値を高めている。また、河口部に位置する下田地区は、中世期から四万十川を介した積み出し港として発展した。このように、「四万十川流域の文化的景観 下流域の生業と流通・往来」は、四万十川下流域の多様な自然環境が生み出す豊かな恵みと、舟運などの流通・往来によって形成される文化的景観である。



下流域の四万十川



四万十川の観光船



口屋内の集落



ライトアップされた沈下橋

く れ み な と り ょ う し ま ち け い か ん
久礼の港と漁師町の景観（高知県高岡郡中土佐町）

平成 23 年 2 月 7 日選定

http://www.mantentosa.com/culture/keikan/keikan_kure.html

久礼の港は、中世より近代にかけて、四万十川流域を中心として領域各地で生産された物資を関西方面へと搬出する主要な港の一つであるとともに、他地域より物資や情報を吸収する重要な拠点の一つとして発達した。特に近世初頭には、家臣団居住地や城館を取り込み、港湾機能に重点を置く小規模な都市プランが形成され、現在の景観はこの構造に基づいて形成されたものである。久礼に残る建物には、激しい台風に見舞われる独特の風土と共生した記憶を示すものが多く、水切り瓦や土佐漆喰は、夏の暑さや高い湿度、あるいは暴風にさらされた暮らしの名残である。明治期には久礼、上ノ加江、矢井賀の三つの漁業組合が設立され、戦後には木材関連事業に変わって鰹漁が久礼の中心的な産業へと発展した。漁師町には家屋が密集し、庶民的な地区の中では玄関脇の流しで魚をさばく人々の暮らしを見ることができる。このように、「久礼の港と漁師町の景観」は、中近世に繁栄した港を核として形成された市街地が、鰹漁とともに発展した漁師町や漁港と相まって形成される独特の文化的景観である。



久礼市街地の全景



久礼漁港



久礼の町並み



旧炭倉庫群



くぼて のうそんけいかん
求菩提の農村景観（福岡県豊前市）

平成 24 年 9 月 19 日選定

<http://www.city.buzen.lg.jp/machi/keikan/kubotekeikan.html>

求菩提の農村景観は、周防灘に注ぐ河川沿いの狭隘な谷間に共通して営まれた農耕・居住の土地利用の在り方を示し、この地域の里に住む人々と山との関係を典型的に表す文化的景観の事例である。天台修験の聖地であった求菩提山（標高 782m）の山中の行場をはじめ、修験者の生活の基盤となった山麓の村落・農地の姿を描いた 18 世紀後半の『豊前（州）求菩提山絵図』とも照合できる点で貴重である。求菩提山の堂舎群は失われて遺跡と化したが、岩峰及び岩窟群の位置・形姿は往時と変わらずに残され、山麓の鳥井畑の村落及び棚田・茶畑などの農地も基本的な骨格・構造がほぼ変わることなく現在に継承されてきた。極めて精巧な給排水網の下に野面積みの石積みにより区画された棚田の区域には、「ツチ小屋」と呼ぶ石積み擁壁から成る農作業用具の保管庫も点在し、修験者が伝えた石積みの技術の名残を示す独特の農地景観が見られる。村落には、豊前修験道の祭礼の流れを汲むお田植え祭をはじめ、季節の節目を成す伝統行事も伝えられている。このように、求菩提の農村景観は、近世に成立し、近現代にかけて、緩やかに進化を遂げたこの地方の土地利用の基本的な骨格・構造を伝えている。



全景



岩岳川沿いに展開する棚田



ツチ小屋



井堰と水路



わらびの たなだ
蕨野の棚田（佐賀県唐津市）

平成 20 年 7 月 28 日選定

<http://ouchi.fhl.ne.jp/tanada.html>

「蕨野の棚田」は、唐津市相知町内に所在し、蕨野区と池区の二つから成る。棚田は、八幡岳の馬蹄形状をした北向きの急斜面地に約 36ha にわたってひろがっている。棚田の石積みは野面積みを基本とし、平均の高さは 3～5m、高いものでは 8.5m に及ぶ。池区には棚田の水源となる 2 つのため池（明治 18 年、昭和 12 年）がある。蕨野の集落は、平山川河谷の標高 150m 付近に疎開村状に展開しており、「ツカ」と呼ばれる防風石垣を伴う民家を残している。技術的な特性から、防風石垣の石積みと棚田の石積みは、同じ石工（集団）によって積まれたと考えられる。

棚田の築造は、少なくとも江戸後期にまで遡ると考えられるが、現存するものの大半は明治～昭和 20 年代までに形成されたものである。棚田とその周辺の森林及び水系は、固有の製造技術や「手間講」と呼ばれる共同作業に基づいて維持され、それぞれの関係を維持しつつ一体として独特の土地利用を持つ文化的景観を造り上げた。現在は、減農薬・減化学肥料によって生産された「棚田米蕨野」が、ブランド化に成功しつつある。



蕨野の棚田全景（北側から）



早苗の緑がまぶしい棚田（南川原）



高さ 8.5m の高石垣（南川原）



手間講隊による田植え



ひらどしま ぶんかてきけいかん
平戸島の文化的景観（長崎県平戸市）

平成 22 年 2 月 22 日選定，平成 22 年 8 月 5 日追加選定
<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-412>

平戸島の小河川沿いの谷部には，安満岳を中心として防風石垣や石塀を備える春日・獅子・根獅子・宝亀，田崎・神鳥・迎紐差の集落や棚田・牧野が展開している。これらの集落の多くは，16 世紀半ばから 17 世紀初頭にかけて書かれたイエズス会宣教師の書簡において，教会や慈悲組合についての記述とともにその名を確認することができる。また，現在も伝統的家屋の中に戦国～江戸時代初期のキリシタン信仰に起源を持つ納戸神を祀るなどかくれキリシタンとしての営みを続け，安満岳や中江ノ島のような聖地とともに，殉教地を伴う独特の様相を現在に留めている。棚田群は，大きなものでは海岸から標高約 200m の地点まで連続して築造され，山間部に点在する若干の耕作放棄地を除けば，全体としてよく耕作されている。地元の礫岩を用いた石積みの中には，生月の技術者集団の手によるものも認められる。以上のように，「平戸島と生月島の文化的景観」は，かくれキリシタンの伝統を引き継ぎつつ，島嶼の制約された条件の下で継続的に行われた開墾及び生産活動によって形成された棚田群や牧野，人々の居住地によって構成される独特の文化的景観である。



平戸西海岸の集落



海沿いに展開する棚田



谷沿いに耕作された棚田



石積み擁壁が卓越する集落

お ぢ か し ょ う ぶ ん か て き け い か ん
小値賀諸島の文化的景観（長崎県北松浦郡小値賀町）

平成 23 年 2 月 7 日選定，平成 23 年 9 月 21 日追加選定

<http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php/view/385>

小値賀島は大小 17 の島嶼群で形成される小値賀町の主島であり，火山活動によって形成された複雑な地形とともに，各種の亜熱帯性植物や野生生物が根付く独特の風土を持っている。各島は，古くより島嶼間を移動しつつ農業や放牧を営む独特の生活様式を維持してきた。文字資料における小値賀島笛吹の初見は明徳元年（1390）であるが，この地は遣唐使船の通過地点として古代において既に流通・往来における重要な拠点であったと考えられ，室町時代には日明貿易に基づく中世の港湾都市として栄えた。江戸時代になると，平戸藩の下で異教徒や異国船の監視を目的とし，押役所や遠見番所が設置された。笛吹の集落は，農村地帯の笛吹在と漁業者・各種職人・商業者等が混在する笛吹浦の 2 地区に大きく別れて形成され，江戸期には壱岐より移住した小田家が鯨組を組織し，新田開発等の事業展開を行うことによって経済的に成長した。島嶼間を移動する生活は，参詣や墓参の営みとして現在まで継承されている。

このように「小値賀諸島の文化的景観」は，多様な地形的特徴を示す島嶼間の移動や近隣諸国との流通・往来に基づいて発展した港や居住地等によって形成される独特の文化的景観である。



小値賀島笛吹集落



浦町地区の古民家と石垣



笛吹新町路地の古民家



大島全景

佐世保市黒島の文化的景観（長崎県佐世保市）

平成 23 年 9 月 21 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-554l>

九十九島のうち最大の島である黒島は、海岸部の標高 50m 付近までは急な断崖となっている一方、標高約 100m 以上はなだらかな地形となっており、畑地や集落が点在する。暖流の対馬海流の影響を受けた海洋性気候であるため亜熱帯植物も多く自生している。江戸時代の黒島は、平戸藩に属する西氏の所領であり、藩の牧場が置かれていた。18 世紀に開拓を目的とする移住が平戸藩の主導で行われ、特に牧場廃止後は跡地開拓のためさらに移住が推進された。また、黒島北方に浮かぶ伊島・幸ノ小島は古くから黒島の属島とされ、伊島では牛の放牧、幸ノ小島では藻場として肥料用の海藻採取が行われた。黒島は夏季・冬季ともに季節風の影響を強く受ける地域で、特に台風来週時には猛烈な南風に襲われる。そのため居住地はできるだけ風の影響が少ない場所が選ばれ、同時に屋敷及び隣接する畑地等の南側を中心に防風林が発達することとなった。防風林にはスダジイなど自然林を活用したものと、アコウなど意図的に植栽されたものが確認される。特に島南部の蕨集落では、亜熱帯系の植物であるアコウが防風林として海側に植えられており、島に豊富な閃緑岩の石で築かれた石垣の上にアコウの大樹の根が張る、特徴的な景観が展開している。このように、佐世保黒島の文化的景観は、近世期の牧に起源を持つ畑地やアコウ防風林と石積みによる居住地、属島における生産活動など、独特の土地利用によって形成される価値の高い文化的景観である。



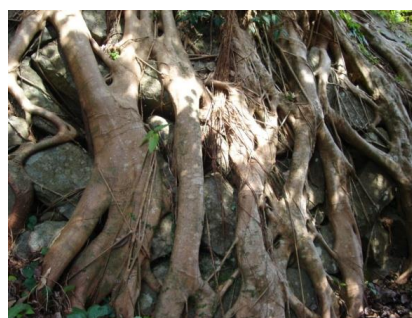
黒島全景



海→防風林→居住地→畑地



石積みが卓越する集落



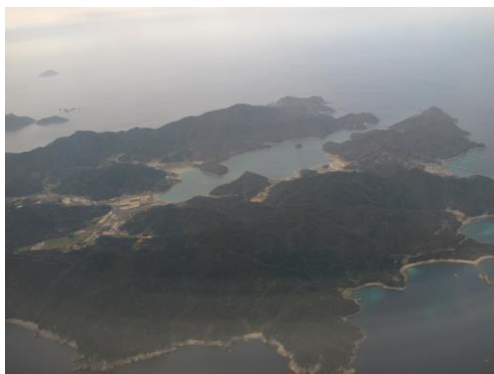
石積みに巻き付くアコウの根

ごとうしひさかじま ぶんかてきけいかん
五島市久賀島の文化的景観（長崎県五島市）

平成 23 年 9 月 21 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-385>

五島列島中南部に位置する久賀島では、島の外延部を形成する標高 2～300m 級の山々から中央部の久賀湾に流入する河川が下流域に緩やかな傾斜の沖積地を形成しており、五島列島では珍しい棚田が営まれている。一方、島の外周は急峻な山々がそのまま海に沈み込む地形となっており、特に海流や季節風の影響を受けやすい島の西側には、急峻な海食崖が発達している。久賀湾に面した緩傾斜地には棚田耕作を生業とする比較的規模の大きい集落が形成される一方、急傾斜地が卓越する外海側には小規模な集落が形成され、段々畑での耕作や漁業が営まれてきた。また、外海に面し季節風が当たる地域を中心にヤブツバキの自生地が卓越している。現在も島内に 2 箇所のヤブツバキ自然林が展開するほか、集落から離れた自生地とは別に居住地近傍や耕作地の周辺にヤブツバキが植栽され、古くから利用されてきた。特にヤブツバキの実を搾ったツバキ油生産は盛んで、整髪用・美容食用・燃料用など様々な利用が行われてきた。このように、五島市久賀島の文化的景観は、地形条件に応じて形成された集落及びその生活・生業の在り方、また島内に 2 箇所所在するヤブツバキ自然林をはじめ、外海側に発達するヤブツバキ林・集落近傍に植栽されたツバキ樹とその利用によって特徴付けられる、価値の高い文化的景観である。



久賀島全景



管理されたツバキ林



内幸泊の棚田



蔵集落内部

しんかみごとうちょうきたうおのめ ぶんかてきけいかん
新上五島町北魚目の文化的景観（長崎県南松浦郡新上五島町）

平成 24 年 1 月 24 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-405>

五島列島最北部に位置する中通島では，沿岸部の浸食地形に立地し漁業を主な生業とする集住形態の集落と，地滑り地形による比較的緩やかな斜面地に立地し主に農業を営む散村形態の集落といった対照的な集落形態が形成されている。当地に人が居住した痕跡は縄文時代に遡り，江戸時代後期までは専ら小規模な漁村が営まれていた。越前や紀州から移住してきたとされる漁民は，加徳と呼ばれる世襲制の漁業権を有し特権的に漁を行ってきた。一方，農業集落は，江戸時代後期に農地開拓・食糧増産のため主に大村藩より農民が移住したことに起源を持つ。開拓を行いつつ分家をするため末子が本家を相続する，イエワカレと呼ばれる独特の慣行により，居住地や農地を広げてきた。現在も主に甘藷が栽培されており，収穫された甘藷は薄く輪切りにしたカンコロに加工される。カンコロの乾燥には木や雄竹で作られたヤグラが用いられ，ヤグラに隣接してカンコロを茹でるジロが設置される。自家消費用の甘藷はそのまま家屋の地下に設えられたイモガマに保存するなど，甘藷の栽培から加工・保存まで一連の生産に関わる施設が各戸単位で形成されている。このように新上五島町上五島北魚目の文化的景観は，厳しい地形条件に適応し，農村及び漁村という対照的な形態を成す集落による価値の高い文化的景観である。



海岸に漁村，山間部に農村が展開する小瀬良集落



上小瀬良集落の段々畑



ジロとヤグラ



江袋教会



ながさきそとめ いしづみしゅうらくけいかん
長崎市外海の石積集落景観（長崎県長崎市）

平成 24 年 9 月 19 日選定，平成 30 年 2 月 13 日追加選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-568>

長崎市外海の石積集落景観は、西彼杵半島中部の出津川及び谷戸川等の小河川流域で営まれる、近世から続く畑作を中心とした集落景観であり、結晶片岩を主とする独特の地質によって形成された石積みの特徴とする。流域の河岸段丘面及び山間部の斜面地では、17 世紀初頭の甘藷栽培の拡大に伴って斜面地の開墾が進み、近世後期にかけて山頂まで畑地が切り拓かれた。幕末に作成された絵図には、住居・畑地・墓地在一つの単位として点在する集落の様子が描かれており、こうした集落構造は現在も継承される。出津・牧野地区では、斜面地を開墾した際に出土した結晶片岩を用いて、土留めの石垣、防波・防風の石築地、居住地の石塀、住居・蔵の石壁など多種多様の石積み構造物が築かれてきた。結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁である「ネリベイ」のほか、明治期にはパリ外国宣教会のマルク・マリー・ド・ロ神父によって、藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの「ド・ロ壁」が導入され、現在もこうした石積み構造物が数多く築かれている。赤首・大野地区においても同様のネリベイが見られる。このように、長崎市外海の石積集落景観は、結晶片岩を主とする地質が特徴の地において、数多くの石積み構造物を築きつつ畑作を営んできた、この地域に特有の土地利用形態を示す文化的景観である。



斜面地に形成される集落



ネリベイ建物



結晶片岩を用いた墓石



玄武岩が使用されている大野教会堂のド・ロ壁

しんかみごとうちょうさきうら ごとういししゅうらくけいかん
新上五島町崎浦の五島石集落景観（長崎県南松浦郡新上五島町）

平成 24 年 9 月 19 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-397>

中通島北東部に位置する崎浦では、砂岩質の五島石を用いた採石業及び石材加工業に基づく文化的景観が展開している。集落では生活用品や建築用材等に五島石が多用されており、運搬に便利な海岸部に展開した採石場跡を含め、独特の土地利用の在り方を示す数多くの痕跡が残されている。豊かな漁場が広がるこの地域では、近世まで捕鯨をはじめとする漁業が行われていた。幕末に沿岸捕鯨が徐々に衰退する一方で、長崎・平戸において建築用材のための石材需要が高まり、崎浦に多く露頭する砂岩がにわかに注目されるようになった。加工された石材は問屋を通じて広く流通したほか、集落内でも消費された。現在も、石碑・墓碑、石臼等の生活用品、道路等の舗装材、家屋の地覆石・神社の鳥居等の建築用材など、五島石を使って様々に加工された夥しい数の石材製品が集落内に見られ、大正 8 年（1919）に建造された頭ヶ島天主堂は五島石を用いた最も顕著な建築である。このように、新上五島町崎浦の五島石集落景観は、幕末から近代にかけて、五島地方のみならず、長崎・平戸など西北九州一帯に流通した五島石及びその石材製品の生産地として特有の土地利用形態を示す文化的景観である。



海岸沿いに展開する集落（赤尾集落）



高さ 6 尺の腰板石を備えた家屋



頭ヶ島天主堂



「割り矢」の跡が残る採石場



つうじゅんようすい しらいとだいいち たなだけいかん
通潤用水と白糸台地の棚田景観（熊本県上益城郡山都町）

平成 20 年 7 月 28 日選定，平成 21 年 7 月 23 日追加選定，平成 22 年 2 月 22 日追加選定

山都町は九州の中央部に位置し，世界最大のカルデラ地形を呈する阿蘇の南外輪山のほぼ全域を占める。町域の南側は九州背梁山地に接し，緑川が東西に貫流している。緑川以北の地質は阿蘇火砕流堆積物が主で，外輪山山頂を水源とする小河川の浸食により解析谷と火砕流台地が形成されている。山都町の中心地である浜町の南方に位置する白糸台地はこの一つであり，四方を河川が囲繞しているため，古くから河川を利用した流通・往來の中心地として栄えるとともに，農業用水に困窮する地形条件から，近世後期において通潤橋を伴う大規模な基盤整備事業を実施することとなった。「通潤用水と白糸台地の棚田景観」は，流通機能において，結節点として重要な場所であったことを示す様々な痕跡を残しつつ，通潤用水とこれに伴う棚田が，造成時期の原形を保ちながら農耕活動が現在に至るまで継続することによって維持されてきた重要な文化的景観である。



10 号水路周辺の棚田



11 号水路の棚田



通潤橋と周辺の棚田



素掘りの 12 号水路と分水吐

あまくさしきつ いまどみ ぶんかてきけいかん
天草市崎津・今富の文化的景観（熊本県天草市）

平成 23 年 2 月 7 日選定,

平成 24 年 9 月 19 日追加選定・名称変更（旧名称：天草市崎津の漁村景観）

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-246>

天草下島の南西部，羊角湾の北岸に位置する崎津では，中世には外国船が出入りする港として，近世から近代にかけては貿易や石炭搬出など流通・往来の拠点として，天然の良港を活かした港湾都市が形成された。狭隘な湾内のわずかな平坦地に家屋が密集し，浦へ出るためにトウヤと呼ばれる小路が数軒毎に形成されている。海上には，竹やシュロを利用したカケと呼ばれる構造物が設けられており，漁船の碇泊や魚干しなど，生活・生業上の施設として利用されている。また，崎津の入江の奥に位置する今富では，今富川の支流である 2 つの小河川が形成する谷地形に集落が形成されており，江戸時代から数次にわたる干拓により拡大された農地において，水田耕作を中心とした生業が営まれてきた。今富からは農産物・林産物が崎津へ搬出される一方，水産物が崎津から今富へもたらされるなど，両集落の密接な関係は現在も維持されている。このように，崎津・今富では，歴史的に流通・往来の拠点であるとともにカケ・トウヤなど独特の土地利用の在り方を示す崎津の漁村景観，及び近世以降の干拓により農地を広げつつ山裾に集落を営んできた今富の農村景観による一体の文化的景観が形成されている。



崎津集落



干拓により拡大されてきた農地



カケと石積み護岸



迫地形に発達した今富集落

みすみうら ぶんかてきけいかん
三角浦の文化的景観（熊本県宇城市）

平成 27 年 1 月 26 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-238>

三角浦の文化的景観は熊本県中西部に位置し、三角ノ瀬戸に面して展開する。三角ノ瀬戸は水深が深く、湾内は比較的穏やかで暴風・波浪等の影響を受けにくいことから、古代より八代海と島原湾とを結ぶ南北方向及び九州内陸部と天草諸島とを結ぶ東西方向の流通・往来の結節点として機能してきた。

三角ノ瀬戸は変化に富んだ海岸地形を成しており、戦国時代に島津氏家老の上井寛兼が和歌を詠むなど古くからの景勝地として知られてきた。近代になると小泉八雲など文人墨客が文学の舞台としたほか、熊本を本拠とする第六師団の保養地に指定され、現在も別荘が立地するなど、三角浦は保養都市として機能してきた。

また、明治 20 年（1887）に内務省雇いのオランダ人技師ムルデルの設計により近代港湾が建設され、三角港は屈指の拠点港として隆盛した。築港と同時に計画的な市街地が整えられ、商業地区及び司法・行政地区等が設置された。道路・水路等から成る建設当初の都市構造を現在まで継承しながら、三角浦は港湾都市として機能してきた。

このように、三角浦の文化的景観は、保養都市及び特に近代以降に大きく発展した港湾都市という 2 つの都市機能が複合した文化的景観である。



三角浦遠景



集落内の街区及び水路



港湾区域



ガイドによる地区の案内

あ そ ぶんかてきけいかん あ そ きたがいりんざんちゅうおうぶ そうげんけいかん
阿蘇の文化的景観 阿蘇北外輪山中央部の草原景観（熊本県阿蘇市）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-904>

阿蘇市では、北外輪山及び中央火口丘の北斜面に大規模な草地が広がり、それぞれ阿蘇谷の平地へ向けて下るにつれて斜面は林地、山裾は居住地、平地は耕作地が広がっている。平安時代の『延喜式』に阿蘇での馬生産を示す「牧」の記述があるように、阿蘇の草地は、千年以上にわたり、牛馬の放牧及び飼料用の草を得る場、耕作地に施す緑肥及びたい肥を供給する場、時には居住地の家屋の屋根及び生活用具の材料を供給する場等として継続的に利用されてきた。草地環境のみで生き残るヒゴタイ・ヤツシロソウ・ハナシノブ等の大陸系遺存植物が生息するネザサ・ススキ群落、シバ群落の草地が広がっており、全国的にも貴重な生態系が育まれている。

阿蘇神社の西方に位置する霜神社では、少女が火焚殿にこもって焚き木を燃やし続けて霜除けの祈願を行う火焚き神事が継承されており、阿蘇の気候風土と生活又は生業が密接な関係を有してきたことが理解できる。阿蘇神社参道沿いの商店街では、阿蘇谷の豊富な湧水を活用した商店街整備等の自主的な取り組みが継続的に実施されており、景観保全及び地域活性化が図られている。

阿蘇北外輪山中央部の草原景観は阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



草原



野焼き



施肥作業



草原

あそ ぶんかてきけいかん みなみおぐにまちせいぶ そうげんおよ しんりんけいかん
阿蘇の文化的景観 南小国町西部の草原及び森林景観（熊本県阿蘇郡南小国町）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-889>

南小国町は小国郷の南半分を占め、東部のくじゅう山系涌蓋山麓から連なる標高 400 m 以上の斜面地に位置する。筑後川源流域にあたるため、北外輪山から流れ出た湯田川、中原川、馬場川、志賀瀬川、満願寺川、田の原川等の中小河川が町域を北流する。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草地が広がる傾向があり、大規模な草地は涌蓋山周辺と阿蘇外輪山から延びる台地上に残る。

江戸時代には、井手（水路）の開削、灌漑整備によって畑から水田への転換が行われた。また、筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、戦後の拡大造林によって、さらに草地や雑木林からスギ林への転換が進み、林地は小国杉を中心とした林業景観が広がる。中原川沿いには、かつて阿蘇一円から牛馬を伴って畜産農家が参拝に訪れたという馬頭観音を祀る神社が残っており、往時の馬の供養と結び付いた景観を知ることができる。田の原川沿いの黒川温泉は、開業してから地域が一体となって、街並みの色彩統一、雑木の植栽、乱立看板等の撤去を実施し、自然景観及び和風旅館を尊重した景観保全による地域づくりを進めていることで著名である。

南小国町西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



野焼き



草原

あそ ぶんかてきけいかん わいたさんろく そうげんけいかん
阿蘇の文化的景観 涌蓋山麓の草原景観（熊本県阿蘇郡小国町）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<http://www.asosekaibunkaisan.com/property/landscapes/icl/>

小国町は小国郷の北半分を占め、北外輪山北側斜面の標高 300m 以上の起伏のある斜面地に位置し、筑後川源流の杖立川が北西の日田方向へ流れる。谷底の居住地周辺に狭い耕作地が広がり、斜面上は林地、谷が深いため居住地から離れた尾根筋高台に草地が広がる傾向があり、大規模な草地は町東部の涌蓋山周辺に残る。

筑後川下流の日田から木材の買い付けが行われた地域であり、明治 6 年（1873）にはさらに多くのスギ・ヒノキを運ぶ必要が生じたため、杖立川の浚渫工事が行われた記録が残っている。現在は小国杉の植林を中心とした林業景観が広がる。小国杉の起源は江戸時代に遡ると言われており、挿し木で生育する樹種であり、強度及び艶があるため優秀な木材となる。

涌蓋山麓では、九重山を熱源とする温泉が多数存在し、至る所で温泉の蒸気が噴き出しており、黒菜と呼ばれる伝統的な葉物野菜の生産、温泉熱を生かした発電・ハウス栽培・調理等が積極的に行われている。

涌蓋山麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



草原



野焼き



放牧の様子



涌蓋山の遠景

あそ ぶんかてきけいかん うぶやまむら のうそんけいかん
阿蘇の文化的景観 産山村の農村景観（熊本県阿蘇郡産山村）

平成 29 年 10 月 13 日選定

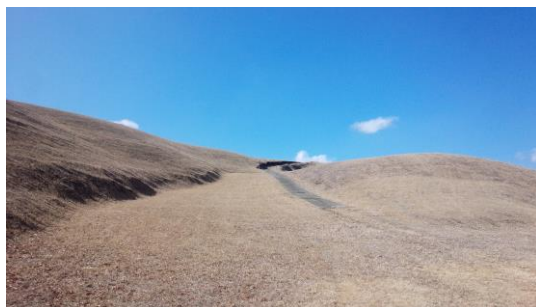
<http://www.asosekaibunkaisan.com/property/landscapes/icl/>

産山村は、阿蘇山とその北東に位置する九重山の火山帯が複合する地域に位置する。九重山麓では、かつて九州が中国大陆と陸続きであったことを示すヒゴタイ、野焼きによって守られてきたキスミレ等の希少植物を確認することができ、貴重な自然環境及び生態系が育まれている。

山麓の山吹水源から流れる産山川と池山水源から流れる玉来川が小さな谷を作りながら南東方向に流れるが、その2つの谷あいを中心に産山村が広がり、2つの川は大野川となって別府湾に注ぐ。山吹水源の下流にも傾斜地が多いため、江戸時代に棚田が開かれ、水路及び石橋群が築造された。扇棚田は、山吹水源から南方に約1.3km導水した標高820mの位置に開墾された約3haの棚田であり、現在も16枚の水田が維持されている。

昭和40年代には阿蘇の広大な草地を対象とした大規模草地改良事業と広域農業開発事業により、草地酪農及び肉用牛の低コスト生産のための飼料基盤整備が行われた。現在、阿蘇の草地で放牧されるあか牛は役牛として育成されてきたものを品種改良した種であり、その生産は産山村の代表的な産業となっている。

産山村の農村景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



草原



山吹水源



田植え時の扇棚田



ヒゴタイ

あ そ ぶんかてきけいかん ね こ だけなんろく そうげんけいかん
阿蘇の文化的景観 根子岳南麓の草原景観（熊本県阿蘇郡高森町）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<http://www.asosekaibunkaisan.com/property/landscapes/icl/>

高森町は、中央火口丘の南東に位置し、阿蘇五岳のうち山頂の凹凸が際立つ根子岳がよく見えるため町の象徴となっている。南郷谷では、白川を中心として、両岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用してきた。

中央火口丘では緩斜面に広めの草地及び南郷檜の林地が広がる一方、外輪山では急斜面が多いため小規模な草地が多い。南郷檜は、昭和 30 年頃に高森町にて育成方法が確認されたヒノキの優良品種である。江戸期に藩の御用木として植えられ、同様な方法で育てられたヒノキのある神社には、巨木となっているものが認められる。

高森・色見地区は、江戸時代には熊本藩の行政単位であった高森手永の中心地として栄え、現在も熊本市街地から高千穂地方へ通じる交通の要所である。現在、国鉄廃線後は第三セクター南阿蘇鉄道の終点となっており、駅周辺では南郷谷の豊富な湧水を利用した酒蔵等がある商店街が広がっている。

根子岳南麓の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



野焼き



草原

あ そ ぶんかてきけいかん あ そ さんなんせい ぶ そうげんおよ しんりんけいかん
阿蘇の文化的景観 阿蘇山南西部の草原及び森林景観（熊本県阿蘇郡南阿蘇村）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<http://www.asosekaibunkaisan.com/property/landscapes/icl/>

南阿蘇村は、南郷谷の西 4 分の 3 を占め、カルデラ床を中心に広がる。外輪壁斜面は内側に向かって急峻な地形をなし山頂付近はナラ、カシ、ケヤキ、ヤマザクラ等の天然林となっている。南郷谷では、白川水源や塩井社水源等の数多くの湧水がみられる一方、火山灰等の堆積層が厚く乏水性の土壌が広がっている。よって、白川を中心として、両岸の河岸段丘を棚田及び段々畑、その南北を居住地として、白川の北側集落は中央火口丘、南側集落はカルデラ壁を草地として利用してきた。江戸時代には、熊本藩から南郷中用水方定役に任ぜられた片山嘉左衛門が、湧水や白川の豊富な水を利用するために、南郷谷の久木野地区に大小の井手（水路）を開削し、その半生を水利事業にささげた。その後も、片山家が四代にわたり南郷の水利事業にかかわって計 6 本の疏水群が開削されており、近代以降も、ほ場整備や用水路整備により畑作から水田への転換が進められた地域である。

南阿蘇村西側（旧長陽村付近）では、かつて熊本市街地から阿蘇山上への入口として「阿蘇参り」の参拝者が湯治をかねて一週間ほど、自炊・宿泊を行っていた時期があり、当地には地獄温泉、垂玉温泉と呼ばれる著名な温泉地が広がる。

阿蘇山南西部の草原及び森林景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



草原とあか牛



草原

あ そ ぶんかてきけいかん あ そ がいりんざんせいぶ そうげんけいかん
阿蘇の文化的景観 阿蘇外輪山西部の草原景観（熊本県阿蘇郡西原村）

平成 29 年 10 月 13 日選定

<http://www.asosekaibunkaisan.com/property/landscapes/icl/>

西原村は、西外輪山の稜線西側及び立野火口瀬の南側に広がる。外輪山の稜線上には俵山（標高 1,095m）、その西には火山活動により形成された大峰火砕丘及び高遊原台地があり、鳥子川、木山川等の小河川が西流する。カルデラ内よりも温暖であるが、「まつぼり風」と呼ぶ冷たい東風が俵山周辺から村域に吹き降ろすため、耕作条件は厳しい。阿蘇の他地域と同様、俵山を含め標高の高い外輪山の斜面は主に草地として利用されてきたほか、台地には居住地と耕作地が広がる。

高遊原台地は、水はけが良く畑作が発達した歴史を持つが、村からは中世の阿蘇神社改築時に合掌材や磨き柱等の良質な木材が提供された記録が残るほか、江戸時代には熊本藩の惣庄屋であった矢野甚兵衛によって、大切畑ため池・堤の造成、水田開発等が行われた。大切畑ため池は、昭和期に高さ 23m のアースダムとして改修され、水田・畑地、防火用のため池・ダムとして、重要な役割を継続的に果たしてきた。平成 28 年（2016）の熊本地震では決壊の恐れがあるため、周辺住民に避難勧告が出され、布田川断層が直近を通っていることが確認されたが、地域の歴史風土及び生活の象徴として、早急な復旧が計画されている。

阿蘇外輪山西部の草原景観は、阿蘇の文化的景観を構成する要素として重要である。



野焼き



草原

小鹿田焼の里（大分県日田市）

平成 20 年 3 月 28 日選定，平成 22 年 2 月 22 日追加選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-362>

日田市の最北端，大分県と福岡県との県境に位置する小鹿田皿山・池ノ鶴地区は，北に英彦山を控え，耶馬日田英彦山国定公園の南西部を占める地域である。日田市北部を南流する小野川の源流の一つである大浦川及び五色谷川が形成した狭隘な谷地において両地区は形成され，水・土・木といった地域資源を巧みに利用した生活・生業が営まれてきた。皿山地区では，当地で採取される陶土を利用した小鹿田焼の生産が行われる。「唐臼」と呼ばれる陶土を粉砕する施設は河川の水力及びアカマツなどの木材を活用したものであり，窯焼きの燃料には周辺で産出される杉材が用いられる。池ノ鶴地区では，急峻な斜面地に当地に分布するプロピライト（変朽安山岩）を利用した石積みの棚田が形成され，「除け」と呼ばれる独特の水利システムによって営農が継続されているほか，シイタケ生産や杉材を活用した薪炭材生産が行われる。「小鹿田焼の里」は，英彦山系を源とする大浦川及び五色谷川によって形成された狭隘な谷間で営まれる，水・土・木等の資源を活かした窯業や農業といった生業が，当地における生活の在り方を示す重要な文化的景観である。



皿山地区全景



棚田と人工林



唐臼



炭焼き小屋・土蔵・ナバ（シイタケ）小屋



たしぶのしょうおさきのうそんけいかん
田染 荘 小崎の農村景観（大分県豊後高田市）

平成 22 年 8 月 5 日選定，平成 28 年 10 月 3 日追加選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-375>

大分県の国東半島の西部に位置し，中世に遡る宇佐八幡宮の荘園遺跡に起源を持つ農耕・居住に関する良好な文化的景観。古代には，半島の中心に位置する両子山から四方に延びる谷筋に沿って，六郷と呼ばれる 6 つの郷村が形成され，そのうち半島の西側に当たる田染郷には 11 世紀前半に田染荘の村落及び農地が開発された。その後，田染荘は宇佐八幡宮の「本御荘十八箇所」と呼ばれる荘園のひとつとして重視され，田染氏を名乗る神官の子孫が代々支配するようになった。田染荘を構成する村落・農地のうち，小崎地区は小崎川中流域左岸の台地上に当たり，史料・絵図に残る村落名・荘官屋敷名と現地に遺存する地名・地割・水路等との照合により，14 世紀前半～15 世紀における耕地・村落の基本形態が現在の土地利用形態にほぼ継承されていることが知られる。現在，水田オーナー制度の下に，住民による文化的景観の保存活用事業が進みつつあり，農地としての土地利用形態の維持にも期待が持てる。中世の荘園遺跡に起源を持ち，近世から近代にかけて緩やかに進化を遂げた国東地方の農耕・居住の基盤的な土地利用形態を示す文化的景観として価値が高い。



小崎地区の水田と集落



六郷山信仰にも関わる岩峯（岩屋）



扇状地礫による畦の擁壁



フロノモトイゼによる独特の水利

べっぶ ゆ 別府の湯けむり・温泉地景観（大分県別府市）

平成 24 年 9 月 19 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-368>

別府市では、西部の火山帯から東部の別府湾に向けて広がる火山麓扇状地に、豊富な温泉資源を活用した生活・生業の在り方を示す文化的景観が展開する。高温の沸騰泉はそのまま利用することができず、気液分離装置によって温泉水と温泉蒸気とに分けられ、温泉水は配管を通して集落へ、温泉蒸気は「湯けむり」として空中に高く放出される。別府古来の自然湧出泉による温泉地は「別府八湯」と総称され、近世後期までは農閑期を中心に周辺の地域から湯治客を集めた。近代になると、別府港の築港、鉄道・道路の整備により観光客が増加し、別府は一大観光都市へと発展した。その中でも鉄輪温泉・明礬温泉では、近世の旅籠・木賃宿に起源を持つ宿泊業が現在も旅館・貸間として継続しており、住民が組合制の下に管理・運営している共同浴場等とともに、地域生活における顕著な温泉水の利用が見られる。また、近世の史料に記録される地獄釜の蒸し料理は現在でも行われているほか、明礬温泉では、石敷きの床に青粘土を敷き詰めた藁葺き小屋で湯の花が製造され、入浴剤として販売されるなど、温泉蒸気の利用も特徴的である。このように、別府の湯けむり・温泉地景観は、扇状地の随所から立ち上る湯けむりの下で営まれる、温泉資源の多面的な利用の在り方を示す文化的景観である。



鉄輪地区全景



別府石の石積みが発達する明礬地区



貸間旅館が並ぶ鉄輪地区



湯の花製造小屋

さかたに さかもとたなだ のうさんそんけいかん
酒谷の坂元棚田及び農山村景観（宮崎県日南市）

平成 25 年 10 月 17 日選定

<https://www.bunkeikyo.jp/landscape/landscape-215>

宮崎県日南市西部の山間地に位置する酒谷地区は、年間降水量が 3,000mm を超える多雨地帯であり、飢肥杉の豊かな林相が広く展開している。集落の起源は未詳だが、近世には郷土と呼ばれる足軽組軍団が畑地とともに山中に分散して居住していた。近代になると、人口の急激な増加に伴う食糧増産の必要性から耕地整理組合が組織され、酒谷の坂元集落では昭和 3 年（1928）から昭和 8 年にかけて、従来の茅場(かやば)・秣場に棚田が開かれた。棚田は、平均勾配 1/7 の斜面地に、高さ 2m～3m の石積みで区画された 5 畝ないし 3 畝の長方形の水田が 27 段にわたって整然と展開する。棚田への導水は約 1.6km 離れた 2 本の谷筋から長大な水路を引いて行われており、棚田内では階段状に設えられた石積みの用排水路が耕地を貫いている。また、集落上部の国有林では早い時期から、集落近傍の民有林は昭和 40 年代に草地・畑地・水田から転用され飢肥杉の林地となっており、良質の船材として油津等に移出された。酒谷の坂元棚田及び農山村景観は、昭和初期の耕地整理事業により完成した石積みや用排水路を伴う長方形区画の棚田及び良質の船材として栽培された飢肥杉林等で営まれる生業と、畑地及び果樹林等を伴う居住地における生活とによって形成された農山村景観である。



坂元棚田と飢肥杉林



直線的な石積み水路



棚田オーナーによるハザ架け



飢肥杉林

きただいとうじま りんこうやまゆらい ぶんかてきけいかん

北大東島の燐鉱山由来の文化的景観（沖縄県島尻郡北大東村）

平成 30 年 10 月 15 日選定

北大東島は沖縄本島東方約 360km に位置する隆起珊瑚礁を起源とする地形を持つ南洋の離島であり、明治期に入って開拓が始まった歴史を持つ。特に、化学肥料の原料となる燐を多く含むグアノ（鳥糞石）が広く堆積していたことから、大正時代から戦後直後にかけて燐鉱石採掘が盛んに行われた。現在も島の北西部に位置する西港周辺では、採掘場、トロッコ軌道、燐鉱石貯蔵庫、船揚げ場等の燐鉱石採掘に関連する一連の生産施設が国内唯一残り、当時の社宅及び福利厚生施設等の生活関連施設が住宅群や民宿として継続的に利用されている。これらの施設では、珊瑚が風化して生成されたドロマイトの白い切石が多用されており、独特の景観を呈している。現在の北大東島の主産業はサトウキビ生産であるが、技術発展とともに近海漁業も盛んになりつつあり、西港周辺ではサトウキビ畑・ため池が広がる一方、往時の施設を利用した魚市場及び水産加工施設が点在する。

日本列島南方の特殊な風土によって形成された離島において、大正時代から戦後直後にかけて燐鉱採掘が行われていたこと及びその後の産業変遷を知る上で重要な景観地である。



遠景



社員倶楽部遺構（式六荘）



トロッコ軌道跡



ドロマイト石垣群

なきじん そんいまだまり やしきりん しゅうらくけいかん
今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観（沖縄県国頭郡今帰仁村）

令和元年 10 月 16 日選定

沖縄島北西部から東シナ海に突き出す本部半島の北側中央部に位置し、イノー（サンゴ礁の浅瀬）、海際の現集落、農地、段丘上の今帰仁城跡及び旧集落跡（史跡、世界遺産）、山林から成る。近世の集落移動に際し、河川や湧水が流れ込む広い低地が近く、海産物が豊富なイノーに面し、地下水が得られる微高地が適地とされたこと、また、北風や台風の影響を避ける工夫が不可欠であったことを全体として伝える景観であり、中でも、風から屋敷を抱護するフクギ屋敷林が、浜抱護や村抱護と共に緑豊かな住環境をつくり、際立った特徴を成す。低地に拡大された農地が隔てる旧集落跡と現集落は、集落立地の考え方が、城との関係性から生活や農業の利便性へと重点を移したことを示す。一方で、沖縄固有の自然崇拜に基づく祭祀や芸能は、集落移転後も継承され、クバの御嶽や城跡を始め、山から浜までの各拝所等で現在も行われている。こうした特徴や特性は、亜熱帯気候に属する島嶼群である沖縄県の集落の成り立ちを知る上で示唆に富み、かつ、地域的な慣習や信仰と景観との関りを良好に伝えるものであり、我が国の生活及び生業の理解に欠くことのできない文化的景観として貴重である。



浅瀬に突き出す微高地に集落が立地



丘陵の今帰仁城跡。近傍に旧集落跡も遺存



フクギの屋敷林



拝所となる浜

